論　文

ウルガータ版聖書を捕まえろ。

－聖ヒエロニュムスの準則－

宮松　浩憲

目　次

１．はじめに
２．序論
３．本研究の目的
４．聖ヒエロニュムス－出自と教育－
５．聖ヒエロニュムスとウルガータ版聖書
６．一覧表とその解説
７．新約聖書
　１．予備的考察　２．考察
８．旧約聖書
　１．予備的考察　２．考察
９．旧約聖書と新約聖書の関係
10．結論
批判に応えて
執筆後記

１．はじめに

辞典は「聖書」に「ある宗教の教義・戒律，教祖の言行などをしるした書物」，それに続いて「キリスト教のバイブル，イスラーム教のコーランなど」といった定義を付している[1)]。この書物に書かれて

※本研究は独立したものではなくて、主たる研究テーマ「中世ヨーロッパにおけるローマ古典文化の継承」に関する研究の過程で生まれたものである。真っ先にお礼を述べたい先生がいる。それは追手門学院大学の加藤哲平先生である。先生の明快で完成度の高いご著書と的確なご助言がなければ、本稿の完成はなかったであろう。この場を借りて心からお礼を申し上げると同時に、ご研究の更なる発展をお祈りしたい。また、移動が困難な時期に、「食べる」を意味する語の初出に関して貴重な助言を頂いた伊藤太吾（大阪大学名誉教授）、関哲行（流通経済大学名誉教授）、河井田研朗（福岡大学名誉教授）、城戸照子（大分大学教授）の諸氏と、文献複写でお世話になった久留米大学図書館の本松由衣さんに、この場を借りて、心から感謝の意を表したい。

いることによって，いかに多くの人々が救われたことであろうか。しかしまた，この書物に書かれていることを巡って，いかに多くの人々が戦い，傷つき，倒れたことであろうか[2)]。

所で, 上掲の説明は聖書の定義として十分であろうか。5 世紀, 南フランス, マルセイユの司祭サルヴィアヌスは「我々の神は，我々が神の魂と精神の深奥から発するものを，聖書を通して知ることを望まれた。それは, 聖書の言葉は, 言うならば, 神の精神（下線, 筆者。以下同様）であるからである[3)]」と語っている。同じくその400年後，北フランス，ヴェルダン近郊のサン・ミイエル修道院の院長スマラグドは「ここであなたは天から送られてきた，そして聖霊がみずから私たちに授けてくれたあの黄金の尺度を見出すであろう。そこでは聖霊が族長たちの高潔な行為を私たちに語り，詩編の霊感が叙情豊かに鳴り響いている。この本は神聖な贈り物で満ちている。それは聖書を含んでいる。それは文法の香りを放っている[4)]」と述べている。

このように，キリスト教の聖書は人間によって書かれたものではあるが，少なくとも当時の人々にとっては，聖書は神の言葉そのものだったに違いない[5)]。

2．序論

「新語」,「廃語」,「古語」などがある如く，言葉は時代と共にある[6)]。ある言葉が流行語として創られる一方，ある言葉は急にまたは次第に使われなくなって死語となる。戦争であれば，勝利に関係する言葉がもてはやされるが，平時であればそれらは見向きもされない。年号もまたその顕著な例である。1 つの王朝が栄える間は，王朝名が公私の書類に記録されるが，新しい王朝に移ると，それらの記録は廃棄されるか，倉庫に保管されてしまう[7)]。

しかし，言葉は無数にあり，そのままでは研究の対象にはならない。そこで選別が必要になる。選別

1）金田一春彦・池田弥三郎編『学研　国語大辞典』（学習研究社，1978年），1052,1056頁；新村出編『広辞苑』（岩波書店，1971年），1222, 1227頁参照。

2）西ヨーロッパの聖者文学は殉教録から始まっている。Voir Aigrain, R., *L'hagiograpie*, Bruxelles, 2000 ; *Acta sanctorum*, Anvers, 1643-　　, 67 vols parus ; *Acta sanctorum ordinis sancti Benedicti*, 6 vols, Paris, 1668-1702.

3）Salvian de Marseille, *De Gubernatone Dei*, III, 5, dans *Œuvres*, 2 vol., éd. et trad. par Lagarique, G., Paris, 1971-1975（*Sources chrétiennes*, 176 et 220), II, p. 188.　中世を通じてラテン語が神の言葉と見なされていたことについては，voir Resnick, I. M., *Lingua Dei, Lingua Hominis*. Sacred Language and Medieval Texts, *Viator*, 21（1990), p. 51-74

4）Smaragdus, *Carmina*, 1,1, MGH,PLM,1, p. 607-8. Voir Leclercq, J., *L'amour des lettres et le désir de Dieu. Introduction aux auteurs monastiques du Moyen Age*, Paris, 1957, p. 48.

5）「聖書の言葉は神の言葉」をはっきりと表明しているのが，イスラーム教の正典コーランである。井筒俊彦『コーラン』（『井筒俊彦著作集』7，中央公論社，1992年）参照。

6）Saussure, F. de, *Cours de linguistique générale (1908-1909)* , éd. par Godel, R., t. I, 1, 5（山内貴美訳『言語学序説』勁草書房，1993年，37-38頁）.

7）中世ヨーロッパの王文書は国王文書庫に保管されていたものではなくて，受取人であった教会組織が保管していたものによって伝存していた事実を想起せよ。Voir Giry, A., *Manuel de diplomatique*, Paris, 1894, p. 28.

の基準はとなると，まず，使用の範囲と期間が問題になる。国民，キリスト教徒といった集団の中である期間以上使用され続けた言葉が対象になる。更に厳密に言うと，1 つの民族または1つの宗教の信者たちの間で数百年かそれ以上使用された，または使用されている言葉が対象となる。しかし，これだけでも対象は無数になる。次は，ある言葉の選択によって，別の言葉が使われなくなったことが条件になる。例えば，フランスにおける猫・雄鶏戦争が有名である[8)]。また，「金持ち」を意味する新しい言葉richが普及することによって，千年以上の歴史をもつラテン語divesが使用されなくなった例が想起される[9)]。他方，赤，白，黒といった色彩に関して言えば，赤が白，白が赤に変わっておれば，当然考察の対象になるが，それは起きていないので，対象にはならない[10)]。従って，以上2つの条件を満たす言葉となると限定されてくる。

人間にとっては，食べるよりも息をすることの方が重要な行為である。しかし，それは自動的で余りにも日常的なので，特別な場合を除いて，文章にすることはない。見ること，聞くこと，話すことも，それらがなくても生きていける。他方，排泄すること，これも重要な行為であるが，嫌われた行為なので，表現されたり公開されたりすることを嫌う。この排泄の前提になる食べることを嫌う人はおらず，1日が3度の食事で区切られており，むしろ食欲がそそられ，文章で適度に表現されることが好まれる。本書では，動詞「食べる」を考察対象に選んだ。

食べることは，言うまでもなく，生存に不可欠な，人間の基本的行為の1つであると同時に，一家団欒に代表される，平和な社会を象徴する。また，食べるは基本的行為であるため，それは曖昧さを嫌う。身分の上下に関係なく，その意味は誰が聞いても同じである。また，それを表現する言葉は，原則として，1つである。従って，それが継承される，または他の語によって取って代わられることは，上述のdivesの死語化と金持ちrichの誕生の如く，それが使われていた文化の終焉を意味することに繋がる。

食べることは人間の基本的行為であるため，そのままでは研究の対象にはならない。これに何かが加わる必要がある。従って，今回は特殊性が加わることになる。それは古代ローマ人の間で古くから使用されていた，「食べる」を意味するラテン語edere とcomedereに，新しくmanducareが加わったことである[11)]。それは時代の要請であったことは言うまでもない。その要請は一部の文化人からではなくて，

8）A.ドーザ『言語地理学』（松原・横山訳，大学書林，1958年），81-83, 163-164頁参照。

9）筆者がキリスト教と向き合うのはこれが最初ではない。下記の拙著では信者には「汝殺すことなかれ」と戒めているにも拘われず，金持ちを意味するラテン語divesを死語に追いやったとしてキリスト教を糾弾している。宮松浩憲『金持ちの誕生』（刀水書房，2004年）。同書はフランスでも出版されている。Miyamatsu, H., *La naissance du riche dans l'Europe médiévale*, Bécherel, 2008. 因みに，J. ル=ゴフは最後から2番目の著書を拙著の仏語訳への批判から書き始めている。Voir Le Goff, J., *Le Moyen Age et l'argent*, Paris, 2010（井上桜子訳『中世と貨幣』，藤原書店，2015年）。

10）Pastoureau, M., *Figures et couleurs. Études sur la symbolique et la sensibllité médiévale*, Paris, 1986.

11）Voir Bourin, M. et Chareille, P. (dir.), *Genèse médiévale de l'anthroponymie moderne*, Tours, 1990- ; Giry, A., *Manuel de diplomatique*, Paris, 1894, p. 351-376 ; Guyotjeannin, O., Pycke, J. et Tock, B.-M., *Diplomatique médiévale*, Turnhout, 1993, p. 88-90 ; Mabillon, J., *De re diplomatica*, Paris, 1681, p. 92-93.

一般大衆から出たものであった。古くからの，同音異義語をもったedereとそれから派生したcomedereでは不十分であったことになる。人々がこの新語を広く使用するようになった結果，それはフランス人，イタリア人，ルーマニア人などによって中世を通じて継承されることになる。但し，manducareの派生語manjarを使用していた，ピレネー山脈の西側に住むカタルーニャ人を除く，manducareに関心を示さず，comedereから派生したcomerを使い続けているスペイン人やポルトガル人は，対象から外れることになるが。しかし，どのようにすればこの新語の登場・普及を把握できるのだろうか。

その証拠の１つに，４世紀に完成したキリスト教のウルガータ版聖書に採用されていることが挙げられよう。これによって，manducareは永遠の生命を獲得したことになる。「貧者」を意味するラテン語pauper－同語の派生語（仏語pauvre，伊語povero，西語pobre，英語 poor）がヨーロッパで現在広く使用されていることは周知の事実であるが－と同様，言語の寿命が聖書によって規定された好例をここに見る。聖書は一部の文化人のためから始まったのではなくて，イエスが最初に向き合ったのは，人口の大半を占める一般大衆であった。従って，新約聖書では民衆の間で定着していた新生のラテン語manducareが使用されている。そして，後述されることでもあるが，その最も象徴的なこと，それは秘蹟の１つにおいてmanducareが使用されていることである。一部の知識人を対象にしたものであれば，または知識人によって書かれた聖書であったならば，古典期の作家たちが常用していた由緒正しいcomedereが使用されていたに違いない。ラテン語で書かれたものとして今日伝存するものの殆どは，当時の文化人が書いた作品である。そこではcomedereが常用されているうえ，中世の知識人は彼らの作品を教科書として使い続けたことから，残念ながら，一般社会におけるmanducareの普及を忠実に再現することができないのが実情である。11世紀に入って，この語は民衆文学，姓としての人名，文書の中で爆発的に出現することになる[12)]。しかし，民衆はこの時初めてこの言葉を使用するようになったとは誰も考えないであろう。何故なら，この時初めて民衆がこの言葉と出会ったのではなくて，民衆の言葉が初めて記録されたに過ぎなかったからである。

従って，manducareはこの時に急速に拡がったと見なすことはできない。「食べる」を意味する，manducareから派生した中世フランス語mangierの初出は980年の史料となっているが[13)]，その語は既に広範囲で使用されていたと考えられる。中世フランス語で書かれた史料としては，842年の「ストラスブールの誓約」が早くから知られているが，その後の研究により880年頃に作成されたメリダの殉教者聖ユー

12）人名の問題は筆者が出版を予定している『「セーヌ川を飲み干す」－中世フランスの人名と心思－』で詳細に論じられるであろう。

13）Greimas, A.-J., *Dictionnaire de l'ancien français jusqu'au milieu du XIVe siècle*, Paris, 1968, p.390. 筆者は「食べる」をテーマにした仏語論文 “Mangeurs d'hommes” dans la France médiévale. Réels ou figurés ?（「中世フランスにおける食人種―事実か比喩か―」）の出版を予定している。

ラリに関する作品の断片，980年頃に作成されたイエス・キリストの受難に関する作品，聖レジェー伝が伝存する[14]。これらの作品の作成地は，フランス文化を南北に分断していたとされるロワール川の北と同様に南にも比定されている。

古代古典期のローマ人は「食べる」を意味する言葉として，主として，edereとcomedereを使用していた。前者はプラウトゥス（紀元前254-184年）の作品に早期の用例が確認されるが，ローマ人に固有のものではなく，ギリシア語を越えてサンスクリト語にまで遡及するほどの遠い起源の先住民たちから継承したものであった[15]。これに対して，comedereには先行語はなく，edereを強調するため，または同音異義語との区別のためにローマ人によって作られたと考えられ，同じく上記の作者の作品で早期の使用が確認される[16]。edereは，上記の如く，頻繁に使われる同音異義語があるため，使用頻度はcomedereよりも劣っていたと考えられる。同時代のギリシア語と同様に，ラテン語にはこれら２語以外にも，「食べる」を意味する語としてmanduco, vescor, pascor, devoro, haurio, mando, ceno, epulorなどがあったが，次に述べるmanducareを除くと，その使用頻度は遥かに劣っていた。

さて，manducareであるが，上述の如く，この語は古典期ラテン語には属しておらず，２世紀初期に活躍したスエトニウスの作品に初出する[17]。しかし，この語がキリスト教のウルガータ版聖書に用いられていることは注目に値する。しかも，既に触れたことでもあるが，それは７大秘蹟の１つである，イエス・キリストと信者とが毎週一体化する聖体拝領の儀式に関して用いられている。「人の子の肉を食べ（manducaveritis），その血を飲まなければ，あなたの内に命はない。私の肉を食べ（manducat），わたしの血を飲む者は，永遠の命を得，わたしはその人を終わりの日に復活させる」，「わたしの肉を食べ（manducat），わたしの血を飲む者は，いつもわたしの内におり，わたしもまたいつもその人の内にいる」（『ヨハネによる福音書』6, 53-54, 56）。聖書において永遠の生命が約束された貧しい人々を指す言語pauperの派生語が永遠の生命を獲得したことは上述の通りであるが，manducareの語も，この儀式と同様に，永遠の生命を獲得したことを意味する。

他方，「金持ち」を意味するラテン語divesを捨てて，ゲルマン語起源のrichを選んだとき，西ヨーロッ

14）Nithard, *Histoire des fils de Louis le Pieux*, éd. et trad. par Lauer, Ph., Paris, 1964, p.104-109. 最近の研究では，中世フランス語は７世紀から話されていたとの見解が出されている。Voir Cerquiglini, B., *La naissance du français*, Paris, 2013, p. 35-36 et 54.

15）Lewis, Ch.T. and Short, Ch., *A Latin Dictionary*, Oxford, 1966, p. 626 ; Gaffiot, F., *Dictionnaire latin-français*, Paris, 2000, p. 576.

16）Lewis, Ch.T. and Short, Ch., *A Latin Dictionary*, p. 373 ; Gaffiot, F., *Dictionnaire latin-français* p. 350.

17）Lewis, Ch.T. and Short, Ch., *A Latin Dictionary*, p. 1107; Gaffiot, F., *Dictionnaire latin-français* p. 955. この様に，manducareは122年に没しているスエトニウスの作品に初出する。他方，「マルコによる福音書」は既に70年頃成立し，他の３つの福音書も最初の世紀のうちに成立していたとされている。ここから，manducareが使用されていない福音書の存在が想定される。また，福音書の改訂に使われた古ラテン語訳テクストの中にはmanducareが使用されていないものも含まれていた可能性が考えられる。

パのキリスト教徒は一致団結していた[18]。しかし，話を現在使用されている「食べる」を意味する言葉に移すと，フランスではmanger，イタリアではmangiare，ルーマニアではmâncaに対して，スペイン・ポルトガルではcomerが使用されている[19]。前者のグループはmanducare，後者のグループはcomedereから派生していることになり，古代ローマ帝国に住むキリスト教徒の間で分裂が起きていたことになる。このような分裂は何に起因していたのか。フランス，イタリアなどにおいて，古典期の由緒正しいcomedereはどうして新しい言葉のmanducareに負けてしまったのか。これは古典古代期の文化が敗退したことを意味する。また，このことはイタリアで最初に古典古代文芸の復活を意味するルネサンスが起きたこととどのように関係するのであろうか。更に，イタリア人はルネサンスに際して，comedereの復活を拒否したことになり，ルネサンスの意味が問われることにはならないだろうか。キリスト教徒内のこのような分裂は，後のルネサンスとの関係で非常に重要なテーマになってくる。

ともあれ，以上から，現代フランス語mangerがラテン語manducareからは派生していることが分かった。このことはmanducareの使用が，2 世紀の初出以降，ラテン語作品において連続して使用されるようになり，他の同義語を圧倒するに至ったとの推論に至るのか。しかし，この推論とは反対に，ローマ古典期に常用されていた言葉comedereが断絶することなく，ルネサンス期まで使用され続けた場合も想定される。その場合，なぜ中世フランス人は如何なる理由で「食べる」という語としてmanducareを選択したかという疑問が出てくる。換言するならば，中世において古典古代を理想とする作家たちはその時代の言葉を継承し続け，それを知らない民衆はmanducareの派生語mangierを選択し広めていったことになる。ここに中世文化の両極化，つまり知識人文化と民衆文化の二重構造論が浮上してくる[20]。この考えに立てば，manducareの多用を文学作品に求めること自体，またラテン語で書かれた文学作品におけるmanducareの多用化を想定すること自体，間違っていることになる。中世の知識人は古典期の作品に強い憧れを持ち続けるがため，著書において民衆とは関係のない言葉を使用し続けた。従って，知識人の間では古典古代は断絶なく生き続けたが，それは民衆とは殆ど無関係にであった。そして，知識人のレヴェルでは古典古代は断絶なく生き続けたため，古典古代文芸の復興は存在しなかったことになり，民衆レヴェルでもmanducareは早くから使用され始め，スペイン人やポルトガル人が継承したcomedereに戻ることはなかった。従って，この推論を進めていくと，少なくともフランスやイタリア

18）前出註 9 参照。

19）Alonso, M., *Diccionario Medieval Español*, Universidad Pontificia de Salamanca,1986, vol. 1, p. XX, XXvi,726 ; l'article « mangiare », dans Lanzi, A., *Enciclopedia Dantesca*, Firenze, 1970 ; Cerquiglini, B., *La naissance du français*, p. 54-57.

20）Voir *La religion populaire en Languedoc, du XIIIe siècle à la moitié du XIVe siècle*, sous la présidence d'André Vauchez, *Cahiers de Fangeaux*, 11, 1975, Toulouse ; Manselli, R., *La religion populaire au Moyen Age*, Montréal, 1975 ; Plongeron,B., *La religion populaire dans l'Occident chrétien*, Paris, 1976.

に関しては，従来のルネサンスの概念は存続できなくなってしまわないだろうか[21]。

次に，この問題を別の視点，つまり古代と中世の連続・断絶説の視点から見てみよう。

古代文化と言えば，それは古典期の文化を意味する。edereやcomedereが継承されることによってローマ文化が間違いなく継承されたことを意味する。古代晩期のmanducareでは，それが古典期の作品には出てこないのであるから，それから古典文化の継承を論じることはできない。つまり，ラテン語manducareが中世を通じて使用され続けたとしても，それは古典古代文化の継承とは等値できないのである。連続・断絶の問題を真の意味で解決するためには，古典期のedereやcomedereが中世を通じて使用され続けたか否かを問わねばならない。この両語がルネサンスに至るまで使用され続けたのであれば，断絶はなかったことになる。そうでない場合，どの時代まで使用され続けたのかが問題になる。9 世紀のカロリング・ルネサンス，10世紀のオットー朝・ルネサンス，12世紀ルネサンスのそれぞれの作品でedereやcomedereの多用が確認できれば，間違いなくこれらの文化は「ルネサンス」に値することになる[22]。その場合，教科書に書かれた14世紀イタリアにおけるルネサンスの開花の意味が問われることになる[23]。また，そうではなくて，両語の使用頻度に変化はなく，反対にmanducareが多用されていることが確認されれば，同様にルネサンスという名称の使用は正しくなかったことになる。

今日，古代の終焉を西ローマ帝国の滅亡と捉える見解は，以前のようにはすんなりと受け入れられないであろう。1 世紀ほど前にベルギーの歴史家，H.ピレンヌは，古代を特徴づける地中海世界の覇権がイスラーム教徒に移り，筆記用紙のパピルスの使用が羊皮紙に取って代わられた 9 世紀まで古代は存続したと主張した[24]。また最近では，フランス全域におけるローマ法の継承にも断絶がなかったとの見解が有力になってきている[25]。他方，今日では，インターネットを活用して，これまで出来なかったことが短期間で出来るようになった。その 1 つが，次に述べる言葉の検索である。今から，J.ミーニュ編

21）Voir Le Goff, J., *Faut-il vraiment découper l'histoire en tranches ?*, Paris, 2014（菅沼潤訳『時代区分は本当に必要か？』，藤原書店，2016年）；Delumeau, J., *La civilisation de la Renaissance*, Paris, 1967（桐村泰次訳『ルネサンス文明』，論創社，2012年）

22）Bullough, D. A., *Carolingian Renewal: Sources and Heritage*, Manchester, 1991. C. H. ハスキンズ『十二世紀ルネサンス』（別宮貞徳・朝倉文市訳, みすず書房, 1991年）; D. ラスカム『十二世紀ルネサンス』（鶴島博和他訳, 慶應義塾大学出版会，2000年）。

23）J.ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』（柴田治三郎訳，中央公論社，1976年）

24）Pirenne, H., *Les villes du Moyen Âge,* dans Id., Les villes et les institutions urbaines, 1, Paris・Bruxelles, 1939, p. 303-432.

25）Lauranson-Rosaz, Chr., *L'Auvergne et ses marges(Velay, Gévaudan) du VIIIe au XIe siècle. La fin du monde antique ?*, Le Puy-en-Velay, 1987 ; Id., Les origines d'Odon de Cluny, *Cahiers de civilisation médiévale*, 37, 1994, p. 255-267 ; Id., "*Theodosyanus nos instruit codex*…".. Permanence et continuité du droit romain et de la romanité en Auvergne, *Cahiers du Centre d'histoire médiévale*, 3, 2005, p. 15-32 ; Id., Le *Bréviaire d'Alaric* en Auvergne : le *Liber legis doctorum* de Clermont, dans Rouche, M. et Dumézil, B(dir.), Le *Bréviaire d'Alaric* aux origines du Code civil, Paris, 2008, p. 241-277 ; Miyamatsu, H., *Legisdoctor*. Survivance du droit romain au nord de la Loire du VIIIe au XIIe siècle（『経済社会研究』（久留米大学），61-1，2020），1-34頁参照。

纂の『教父著作集』[26] を対象にするが，それには重要な前提がある。それは，集成のタイトルが示す如く，宗教関係の著作が中心になっていることを念頭に置いてもらう必要があるということである。そのことは，上述の如く，manducareの多用を当然のこととして，予想させる。重要なことは，これを前提に次の結果を見なければならないということである。comedereと manducareの両語を検索すると，少し乱暴ではあるが，興味深い事実が得られる。comedereが使用されていない巻が30とmanducareの倍にのぼる一方，5回以下の使用ではcomedereが145巻に対して，manducareが124巻と，古典期ラテン語への関心の後退が確認される。しかし，教父たちは聖書の基準に従ったに過ぎないと言ってしまえば，正しくその通りであるが。また，所々で，異常な数値が現れている。4世紀の聖ヒエロニュムスの著作が収められた第23巻では，manducareの使用は3頁に対して，comedereの使用は23頁で確認される[27]。このcomedere偏重は，後述される，彼が新約聖書の重要な箇所にmanducareを用いた責任者だったとすれば，予想に反する事実である。

一般大衆に向けた聖書と自身の著作では，異なる心理が働いていたことになる。貴重な長編の歴史書と聖者文学の手本となる作品を多数残している，6世紀のトゥール司教グレゴリウスも，考察の対象になるであろう。『歴史十巻』で確認される「食べる」を意味する動詞としてcomedereの8回に対して，manducareは1回にしか過ぎず，古典期作品の崇拝者としての側面を見せつけている[28]。同著作集の第133巻が当てられている，10世紀前半のクリュニー修道院長オドンの著作にはmanducareの使用は確認されない。彼は古代ローマ人の末裔で，古典古代の文化を敬愛していた結果であるとすれば，その事実は彼の出自をこれまでのゲルマン人から，ローマ法を継承する古代ローマ人の末裔に変更しようとしているChr. ロランソン・ロザの意図を肯定することになる[29]。また，12世紀前半に活躍したアベラールの著作が収められた巻[30] では，comedereに異常な動きは認められないが，同時代の教会作家たちと異なって，manducareの頻出が確認される。古典古代からのこのような距離は，彼をもって中世人の出現とすることへと繋がるのであろうか[31]。更に，この集成全体を通じてcomedereの使用頻度にルネサン

26）Migne, J. P., *Patrologiae cursus completus. Patres…ecclesiae latinae*, 221 vols, Paris, 1844-1864. 最後の4巻は索引に当てられているので，217巻が検索の対象になる。

27）例えば，『ヒラリオン伝』（Migne, *PL*, 23, col. 31, 33, 47）では「食べる」を意味する動詞が3回使用されているが，その内の1回は聖書の言葉（II Thess, III,10）としてのmanducareで，残りの2回は自分の言葉としてcomedereが使用されている。聖者作の聖人伝の邦訳としては，戸田聡編訳『砂漠に引きこもった人々』（教文館，2016年）がある。

28）Grégoire de Tours, *Libri historiarum X*, MGH,S.r.M..1-1 ; *Miracula et opera minora*, *ibid*., 1-2. Voir Bonnet, M., *Le latin de Grégoire de Tours*, Paris, 1890; Goffart, W., *The Narrators of Barbarian History*, Princeton, 1988, p. 112-234; Van Dam, R., *Saints and Their Miracles in Late Antique Gaul*, Princeton, 1993 ; 宮松浩憲「トゥール司教グレゴリウスと『フランク史』」（『産業経済研究』（久留米大学），42の4，2002年），61-76頁参照.

29）Voir *supra*, la note 25.

30）Migne *PL*, 178.

31）Wolff, Ph., The Cultural Awakening, New York, 1968 ; Morris, C., *The Discovery of the Indivudual, 1050-1200*, London, 1972（古田暁訳『個人の発見（1050-1200年）』，日本基督教団出版局，1983年）; Gurevich, A.Y.,

スに至るまでは特別な変化が認められないとすれば，古典古代の精神がルネサンスに至るまで受け継がれていたことになり，ルネサンスの意味が問われることになる。但し，これは一部の知識人に共通することに過ぎず，これをもって古典古代文化の連続性を主張する根拠としては少し弱いように思われるが。

3．本研究の目的

【その１】 ここでの目的は聖ヒエロニュムスが如何なる版の聖書を底本に翻訳・改訂を企てたかを知ることではない。従って，ここで出来ることはウルガータ版聖書の作成に使用した原本の特定ではない。それは不可能に近い。今日のように，翻訳者による底本の子細な記述は残されていない。底本が伝存したとしても，そこには筆者には不慣れな言葉が使用されており，訳が間違っているか否かの判断も筆者にはできない。それをしようと考えたこともない。本稿での目的は現行ウルガータ版聖書が聖ヒエロニュムスの手によるものか否かの一点につきる。ウルガータ版聖書と聖ヒエロニュムスの聖書とは同じではない。両者の関係は今日に至っても完全に解決されていない[32]。ここで使用する「聖ヒエロニュムスの聖書」という表現は，聖者が自ら行ったまたは自らの監修のもとに行わせた聖書のラテン語訳の意味である。

【その２】 聖書学のテーマとして，新約聖書と旧約聖書の一体化の試みが古代末期から営々と続けられている。今日では両者を一体的に捉えることが常識となっている[33]が，本稿ではそれへの疑問を，非常に小さいが，提示してみたい。

聖ヒエロニュムスは有名な歴史上の人物であり，多くのテーマの研究が出ていて，主要なテーマの研究は尽くされた状態にあるように見える。しかし，本当にそうか。西洋史学同様，これまでの研究方法では未解決の問題，不十分な研究が少なくなく存在するに違いない。今後求められるのは，従来の方法による研究の深化がまず挙げられるが，ヒエロニュムスに関する研究のない筆者にとって，それは非常に困難な，否殆ど不可能に近い仕事になるであろう。これ以外には，筆者がこれまで専門にしてきた研究と関係した，そして少なくとも専門分野の研究者から見て，新しい視点からの研究がある。確かに，そうである。しかし，これとても殆ど素人に等しい筆者にとって，ハードルは余りにも高すぎる。研究の質は不問にするとして，本研究は後者に属するとだけ述べて，兎に角次に進むことにする。

The Origins of European Individualism, Oxford, 1995 ; Schmitt, J.-Cl., *Le corps, les rites, les rêves, le temps : essais d'anthropologie médiévale*, Paris, 2001（渡邊昌美訳『中世歴史人類学試論：身体，祭儀，夢幻，時間』，刀水書房, 2008年）.

32）後出註61参照。

33）加藤哲平『ヒエロニュムスの聖書翻訳』（教文館，2018年），第３章；Kato,T., Jerome's Understanding of Old Testament Quotations in the New Testament, *Vigiliae Christianae*, 67(2013), p. 289-315.

4．聖ヒエロニュムス－出自と教育－

306年，キリスト教徒に対する最後の大迫害を行なった皇帝ディオクレティアヌス１世の後を継いだコンスタンティヌス１世はローマ帝国を再統一した後，313年にはミラノ勅令でキリスト教を公認，325年にはアリウス派追放の決議が採択されたニケア公会議を主宰する[34)]。彼の３男，コンスタンス１世の治世の347年，聖ヒエロニュムスはストリドンの裕福なキリスト教徒の両親の間に生まれた。生誕地は現在のスロヴェニア共和国の首都リュブリャナの近郊に位置し，近くには聖者が上京の際に使ったであろう街道が走っていた。地元で初等教育を修了すると，12歳でローマに出て高等教育を受ける[34)]。ここで注目されるのが，当時最高の教師と言われた文法と修辞に長け，ヴェルギリウスの著作の注釈家として知られたアエリウス・ドナトゥスの指導のもと，普通科在籍の４年間文献学，翻訳，注解の基礎を習得したことである。専攻科に進むと，優秀な学友たちにも恵まれ，修辞学の学習に没頭，13世紀のジェノヴァ大司教ヤコブス・デ・ウォラギネが聖者伝の中で「彼は昼はトゥリウス（・キケロ），夜はプラトンを一心不乱に読みふけっていた一時期があった[35)]」とあるのはこの時期のことである。彼の蔵書癖はよく知られており，彼がキケロ以外の古典期の作家の作品を読み漁っていたことは想像に難くない。多くの伝記は聖者のキリスト者または聖書翻訳者としての側面を強調するあまり，ローマ古典崇拝者としての側面が軽視されてきたと考えられる。西ヨーロッパにおける古典古代文学への尊敬は，古代・中世を通じて不変であった。聖職者といえども，これから外れることはなかった。それほどこの時代の文芸への尊崇は強かったのである。従って，この２つの側面の葛藤の中で，ヒエロニュムスの聖書翻訳の仕事を捉え直す必要性があるのではなかろうか[36)]。聖者のこの後の詳細な経歴はほぼすべて解明されているので，他に譲ることにする。

以上のように，彼は古典期ローマの作家の作品を読み漁っていた。当然，そこには「食べる」を意味する言葉としてedereとcomedereはあったが，manducareは使用されていなかった。従って，聖者が旧約聖書にcomedere，新約聖書にmanducareを配した理由が問われる。その説明は訳者自身によっては行われておらず，勝手に推測する以外に方法はない。edereは，上述の如く，古代ローマ人の固有の言葉ではなくて，彼らよりもずっと古く，サンスクリトに起源をもち，多くの民族によって受け継がれて

34）Kelly, J.N.D., *Jerome. His Life, Writings, and Controversies*, New York, 1975, p.1-2.
35）*Ibid*., p. 5-9.
36）*Ibid*., p.10 et suiv. ヤコブス・デ・ヴォラギネ『黄金伝説』（前田敬作・山中知子訳，人文書院，1988年），４巻，14頁参照。

ものである[37]。『マタイによる福音書』(9, 10) に「新しいぶどう酒は，新しい革袋に入れるものだ。そうすれば，両方とも長もちする」との１節がある。これに従い，起源の非常に古い旧約聖書で，この起源の古いedereから派生し，常用されるようになっていたcomedereを使ったのであろう。他方，既述の如く，後者は２世紀の史料に初出する，歴史の浅い言葉であった。もっとも，その語源はmandereで，その類語がギリシア語にもあることからも，その起源は非常に古い[38]。これに対して，同じ意味でありながら，manducareには負のイメージが付いて回る。今日，manducareから派生した現代語はcomedereの派生語を駆逐して，フランス，イタリア，ルーマニアなどで「食べる」を代表する動詞として広く使用されている。しかし，その起源は比較的新しいこと以外に，何か理由があるのであろうか。その原因の１つはそれが下層民の間で流行り始めた言葉でもあったことにあると推察される。行列や笑劇に登場していた滑稽なマスクをつけて汚い歯をむき出した大食漢manducusから派生した言葉であった[39]。言葉の持つ悪いイメージは中世の「コミューヌcommunio」という言葉でも確認できる。この語は，1112年４月25日，パリの北東に位置するランの市民が自治権獲得のために蜂起，「コミューヌ」，「コミューヌ」と叫んで司教館に放火し，司教とその一党を殺害，更には大聖堂も灰燼に帰してしまう。この出来事を記したノジャン修道院長ギベールは自伝の中で「コミューヌ，この新奇で嫌悪すべき言葉」と吐き捨てている[40]。manducareは，既述の如く，スエトニウス（122年没）の作品に初出するが[41]，辞書での引用例は非常に少なく，その後の使用例の年代も確定されていない。フランスにおける文書での初出は南フランス，アルル司教座教会の1000年の文書で確認されている[42]。

聖者が書いた「翻訳の最高種」では翻訳に関するすべての問題点が述べられているのだろうか[43]。そこで述べられている見解に従えば，本稿での問題点は素通りされてしまう。当該書簡ではこれに従って話が進められているが，これがすべてではなく，これからはみ出した，気付かれてこなかったことが残されている。翻訳には天智と人智の２つがある。前者に属するのが記述できないこと，つまり聖ヒエロニュムスの血肉と化しているもので，comedereとmanducareの使い分けがこれに属する。天智に属するからこそ，これまで誰にも気づかれることはなく，また表面化することもなかったのである。他方，「翻訳の最高種」で扱われていることは人智に属するものである。また，聖ヒエロニュムスが隠しておき

37）Gray,Ch., *Jerome, Vita Malchi. Introduction, Text, Translation, and Commentary*, Oxford, 2015, p. 21-54; 加藤哲平，前掲書，36頁参照。
38）前出註15参照。
39）Lewis, Ch.T. and Short, Ch., *A Latin Dictionary*, p. 1107; Gaffiot, F., *Dictionnaire latin-français,* p. 955.
40）前出註15参照。
41）Guibert de Nogent, *Autobiographie*, éd. et trad. par Labande, E.-R., Paris, 1981, p.320.
42）従って，ラテン語manducareの使用は聖書写本の作成年確定の重要な指標になる。特に，紀元1世紀に作成されたとされるラテン語ヴルガータでこの語が使用されている場合，すべて偽作とは言わないが，細心の注意が必要になる。
43）Du Cange, *Glossarium mediae et infimae latinittis*, 5, p. 214b.

たいこともあったに違いない。これは「翻訳の最高種」では当然のこと述べられていない。また，この書簡では人によって異なる解釈を生む文章や長短の句は問題にはなっているが，1つ1つの言葉が問題になってはいない。つまり，これまでそれらは誤解を生むことはないと考えられてきたことになる。しかし，本稿では文章の最小単位である単語そのものが考察の対象になる。実際は，書簡で述べられていることと違って，そうではなかったのである。そのことを本稿が明らかにすることになろう。

従って，聖ヒエロニュムスの聖書翻訳の基本姿勢または大前提は，「食べる」を意味する原語（ヘブライ語またはギリシア語）に対して，新約聖書ではmanducare，旧約聖書ではcomedereを当てることであった。その理由は全く単純で，起源の古いものには起源の古いものを，起源の新しいものには起源の新しいものを当てるという方針によるものであったと考えられる。

5．聖ヒエロニュムスとウルガータ版聖書

ウルガータ版聖書は原本の単なる翻訳，それともそれを越えた何かが含まれているのであろうか。聖者による修正の幅が問題になる。その当時，数多くのラテン語版の聖書が既に存在していたと考えられる[44]。最も古い聖書はラテン語で書かれてはいなかったと考えられることから，ラテン語版聖書は原典からの翻訳となる。4世紀当時，多くの版のラテン語聖書が流布していたと考えられる。この状況下で異端が発生していたのである。この状況を解決するには，流布しているラテン語版の聖書の校合だけでは不十分である。問題を解決するには，より古い，ラテン語版聖書の原本となっているものを基本に翻訳し，訳語に関してはすでに聖書で使われているラテン語を参考にしながら，適語が選択されていたと考えられる。

聖者による聖書の改訂・翻訳の仕事は通常，次の3期に分けられる。第1期は382年から始まり2年間続く。この間聖者は，ローマ教皇ダマスス1世（366-384年）の命を受けて，ラテン語世界で広く読まれていた古ラテン語訳の新約聖書（4福音書）と旧約聖書（詩編）を改訂する[45]。前者に関しては，古ラテン語訳をギリシア語テクストとつきあわせて誤っている部分を訂正した。後者の校訂には，古ラテン語訳が「七十人訳」の助けを借りながらではあったが，ほぼそのまま用いられたとのことである。

44）Epist. 57, dans Migne *PL*, 22, col. 568-579. 邦訳には高畑時子「ヒエロニュムス著「翻訳の最高種について」（書簡57「パンマキウス宛の手紙」」（『近畿大学教養・外国語センター紀要・外国語編』6巻1号，2015年，153-171頁）がある。

45）聖者は「ヨシュア記」の序文の中で，「ラテン人の間では写本原本とほぼ同数の謄本があり，彼らは自分の判断で正しいと思われることを付け加えたり削除したりしている。そして，そうすることで，相互に矛盾することが起こるなど全くあり得ないと」と述べている。Voir *Praefatio Hieronymi in librum Josue Ben Hun,* Migne, *PL*, 29, col. 463. 加藤哲平，前掲書，311頁参照。

第２期は聖者がベツレヘムで活動した386年から391年の５年間に当たっていて,「詩編」,「ヨブ記」,「歴代誌」, 伝統的にソロモンに帰属される諸書（「箴言」,「コヘレト書」,「雅歌」）の古ラテン語訳を,「七十人訳」テクストとオリゲネスのヘクサプラ（六欄対照旧約聖書）に基づいて改訂した。なお, ヒエロニュムス訳の「詩篇」は３種，つまり（１）ローマ詩篇（「七十人訳」による詩篇の古ラテン語訳を改訂したもの,（２）ガリア詩篇（古ラテン語訳を，マソラ本文に対応させるため改訂したもの,（３）ヘブライ詩篇（ヘブライ語テクストから直接訳したもの）が伝存する。第３期は聖者がベツレヘムに滞在していた390年から始まるが，ここでの特徴はこれまで使用してきたギリシア語またはラテン語底本から離れるという，方法上の大きな方向転換を図ったことである。そのために，聖者はパレスチナのユダヤ人教師の手を借り, ヘブライ語を学ぶ。この準備のあと, 聖者は「七十人訳」や古ラテン語訳を底本とせず, 旧約聖書の全文書を直接ヘブライ語テクストからラテン語に翻訳するという大仕事に挑戦する。そして, ヘブライ語で書かれたマソラ本文からの翻訳に取り組み，この事業を無事終わらせたとのことである。但し, 旧約聖書のうちで「第二正典」に関しては,「トビト記」,「ユディト記」, また「ダニエル記」と「エステル記」の補遺を急ぎ足で訳したのみで，その他の「マカバイ記」,「知恵の書」,「シラ書」などは手をつけなかった。そして，ヒエロニュムスがこの長大な翻訳事業を完遂することができたのは，開始から17年あとの407年頃のことである。通常,「ウルガータ」とは，1545年に始まったトリエント公会議においてラテン語聖書の公式版として定められたものを指す[46)]。しかし,「ウルガータ」は進化し続けているというのが正しい理解であろう。筆者が底本として使用したのは「新ウルガータ*Nova Vulgata*」で, 1965年に教皇パウロ６世の指示によって原典に基づいた「ウルガータ」の校訂が決定され，1979年に完成したものである[47)]。

このように，聖者が新約聖書・旧約聖書の完成原稿を提出した事実を証明するものはない。加えて, 中世の写本で，表紙・裏表紙またそれ以上が欠落したため，表題の不明なものが多く伝存することは周知の事実である[48)]。

６．一覧表とその解説

この表はウルガータ版の新約・旧約聖書で使用されているラテン語の動詞「食べる」に関するもので

46）Kelly, J.N.D., *Jerome. His Life, Writings, and Controversies*, New York,1975, p. 86-89　加藤哲平，前掲書, 142-151頁；片山寛「聖書翻訳がもたらした祝福と呪い－*Vulgata*を例として－」(『西南学院大学論集』，77の1, 2020年，5-6, 15-19頁）参照。
47）Voir l'article "vulgate" dans le *Grand Larousse encyclopédique*, tome 10.
48）Voir l'article "Constitutio apostolica" dans *Nova Vulgata*, p. V-VIII.

ある。「食べる」を意味するラテン語には，既に古典期から使用されていたedereとcomedereに加えて，ceno，epulor，devoro，haurio，mando，manduco，pascor，vescorなどがあった。従って，聖書の翻訳・改訂で「食べる」を意味するラテン語を選択する際，聖者は古典期の上記２語に固執する必要はなかったことになる。また，manducareは，上述の如く，紀元２世紀の作品に初出する新成語であった。しかし，これら「食べる」を意味するすべての動詞を考察の対象にすることは膨大な時間と体力を要するため，本稿では比較的使用頻度の高いcomedereとmanducareの２語にedereを加えて考察を行うことにする[49]。一覧表には前者２語が使用されている頻度が記されている。詳細は行論中に示されるので，ここでは大まかな特徴を確認してもらうことにする[50]。

この表を見て，次のような感想が予想される。聖書は神の言葉であるから，旧約聖書はcomedere，新約聖書はmanducareで統一しようとしたことは一応理解できる。しかし，それに違反した行為はどうして生まれたのであろうか。聖書が神の言葉である以上，たとえ少数であったとしても，ことは重大で，すべて不注意の結果でしたでは済まされない。従って，原因の解明は不可欠である。また，この表からは，次の３つの意見が出されるであろう。第１は，聖書は神の言葉であり，１語１句間違いは許されない。従って，原則に反する事例がある聖書はすべて偽書であるとする見解である。第２は，翻訳者も人間，人間に誤りは付きものである。従って，すべてを真正とする見解である。第３は，両者の意見はいずれも極端で，まず原因の究明が先である。その後で，偽りか真正かの結論を出すべきであるとの見解である。本書が採るのは最後の見解である。ともあれ，この一覧表から引き出される結論は新約聖書ではmanducare，旧約聖書 ではcomedereを当てるという訳者の大前提が大まかではあるが貫徹されていることで異論はなかろう。これを共通認識として読者と共有して，出発することにする。

ローマ教皇ダマスス１世が聖ヒエロニュムスに命じたのは異端を生まない聖書の作成，つまり二義を生まない文章の作成である。従って，手足を拘束され，自由が奪われた状態で文章を書くことになる。普通の作家はもちろん，古典期文学に心酔した者にとってこれ以上酷なことはない。更に，原本の権威を損なってはならないとの厳しい条件が課されていたに違いない。この厳しい条件が生み出す作品とは何か。それは人間には考えられないことである。換言すれば，「聖書の言葉は神の言葉である」が意味する如く，神にしかできないことになる。聖ヒエロニュムスはこれに挑戦したのである。この原則に慣れるのに多くの時間がかかったであろう。しかし，最後まで慣れきることはできなかったのではなかろうか。兎も角，この挑戦の間は，彼は正しく苦行僧であったに違いない。

49）例えば，トゥール司教グレゴリウス著『フランク史』の伝来写本や表題に関しては，Voir Praefatio auctore Br. Krusch, dans *MGH*, *SRM*, 1-1, p. IX-XXXVIII.

50）edereが加わるが，聖者が立てた大前提はcomedereとmanducreの２項対置図式であることを忘れてはならない。

7. 新約聖書

1．予備的考察

聖者は，彼の書簡が語っていることからも，新約聖書から翻訳を始めたと考えられる。しかし，「食べる」を意味する動詞を２本立てにするとの翻訳の大前提はどこから生まれたのだろうか。後述される如く，それは一部においてはヘブライ語版旧約聖書からだと推察される[51)]。訳業を始める前，聖者はこの旧約聖書を既に熟読していたと考えられる。何故なら，ここでは動詞「食べる」にすべて同一の言葉 לאכול が使用されているからである。最初に完成したのは新約聖書であったが，動詞「食べる」の使用に関する上記の大前提は，旧約聖書から得られたのかもしれない。より正確に言うならば，聖者が独自に決めていた大前提は旧約聖書を通読することでより強固なものになったと。旧約聖書も神の言葉とすれば，「食べる」を１語に統一することは誤解の発生を予防し，加えて「聖書の言葉は神の言葉」であるから，それは神の意志でもあった。他方，ギリシア語版を底本にすると，ギリシア人は文学の民であるから，ギリシア語版新約・旧約聖書[52)] では，後述される如く，「食べる」を意味する多様な言葉が使用されている。同一動作の異なる語による表現は異端と繋がる，異なる解釈を生む危険性を孕んでおり，これは絶対に避けなければならないと考えたに違いない。そうでないと，「自分の翻訳の大義がなくなってしまう。ここは，ヘブライ語版旧約聖書を底本に使い，ギリシア語版は参考書として準備することにしよう」というのが，聖者の基本方針であったに違いない[53)]。

さて，動詞「食べる」はすべてmanducareによって置き換えられているだろうか。最初の「マタイによる福音書」（以下，「マタイ」と略記）では，その言葉は第６章25節に初出する。それは「だから，言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと，また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな（下線，筆者。以下同様）」というイエスの言葉が出てくるが，確かにmanducareと訳されている。第９章と第11章も問題はない。manducareの使用はこのように順調に続けられるが，第13章に入って，突如「食べる」の別の動詞comedereが闖入し，第15章でもそれは繰り返されている。最後に，第24章から第26章にかけて再び動揺がみられ，「食べる」を意味する動詞３語の鼎用が確認される。この混乱を乗り越えて，「マルコによる福音書」[54)]（以下，「マルコ」と略記）へと移っていく。ここでの

51）本稿では，*Nova vulgata bibliorum sacrorum editio*, Vatican,1986を底本として使用する。
52）ヘブライ語聖書の底本としてはInterlinear Bible : Greek, Hebrew, Transliterated, English, Strong's (biblehub.com)を使用した。
53）「七十人訳」の底本としてはA. Rahlfs, *Septuaginta*, Stuttgart,1935，ギリシア語版新約聖書の底本としてはE. Nestle, E. Nestle, K. Aland, *Novum Testamentum Graece et Latine*, Stuttgart, 1964を使用した。
54）加藤哲平，前掲書，259-262頁参照。また，聖者の聖書翻訳･改訂の作業は聖者単独ではなくて，聖者，筆記者，写字生の3者による共同作業であった。従って，筆記者と写字生に関する詳細は不明であるが，誤記の可能性

manducareの初出は第２章16節からで，大原則は１回の例外を除いて厳守されている。この例外であるが，それは先行する福音書での話が繰り返されているためである。「ルカによる福音書」に移り，ここでの初出となる第４章２節「その間，何も食べず，その期間が終わると空腹を覚えられた」では，確かにmanducareが使用されている。上記の１例以外にもcomedereの使用が１回確認されるが，ここで注目されるのが第10章７節から第22章30節にかけて５回確認される，使用頻度の低いedereの多用である[55]。こうして３語の使用が確認された「ルカによる福音書」（以下，「ルカ」と略記）を読み終え，「ヨハネによる福音書」[56]（以下，「ヨハネ」と略記）に進もう。ここでのmanducareの初出は第４章32節「「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた」においてである。この後，同語は13回使用されてこの書は終わっている。当該福音書において「食べる」の行為がすべて同一の動詞manducareによって表現されていることは，聖者の訳業が作業の進行とともに純化されていたことを意味すると同時に，「ヨハネ」が上記３つの共観福音書と異なることの特徴と見なすことができるのであろうか。

これ以降の諸書は，非常に少ない例外を除いて，「食べる」を意味する動詞はすべてmanducareに統一されている。最初の「使徒言行録」（以下，「使徒」と略記）でのmanducareの使用は４回を数え，その初出は第10章41節「しかし，それは民全体に対してではなく，前もって神に選ばれた証人，つまり，イエスが死者の中から復活した後，ご一緒に食事をしたわたしたちに対してです」の中で出会う。続く使徒パウロの手紙を構成する「ローマの信徒への手紙」ではmanducare が５回，「コリントの信徒への手紙」１・２では16回，「テサロニケの使徒への手紙」２の第３章で３回使用されているが，「ガラテヤの使徒への手紙」の第２章12節では，comedereと edere の使用という逸脱が確認される[57]。しかし，最後に置かれた「ヨハネの黙示録」では再び２回のmanducareの使用に戻っている。

以上の予備的考察から，新約聖書に登場する動詞「食べる」をmanducareで統一するとの翻訳者の意図をより強く感じとることができた。しかし，上述の例外事項の解決が残されている。これらは訳者の，上述された古典主義崇拝との葛藤から生じたものなのであろうか。以下，翻訳者が底本に使ったギリシア語新約聖書と比較しながら，これらの異常事項を考察していくことにする。

が完全に排除されていたとは言い難い。Voir *Praefatio Hieronymi in libros Salomonis juxta LXX interpretes*, Migne, *PL*, 29, col. 403-404. 邦訳に関しては，加藤哲平，前掲書，302頁。

55）当該福音書に関する邦語研究としては，高畑時子「ウルガータ聖書・マタイによる福音書における翻訳法：ヒエロニュムス『書簡57』との比較研究)」（『比較文化研究』122, 2016年，63-74頁）参照。

56）当該福音書に関する邦語研究としては，高畑時子「ウルガータ聖書･マルコによる福音書におけるヒエロニュムスの翻訳法（『世界文学』122, 2015年，61-70頁）。

57）該当箇所は第10章７節，第12章45節，第17章27・28節，第22章30節である。

一　覧　表 (1)

旧　約　聖　書		
書名	manducare	comedere
Gn		20
Ex	1	18
Lv		19
Nb		5
Dt		16
Jos		
Jg		4
Rt		
1 S	1	11
2 S		3
1 R		11
2 R		9
1 Ch		
2 Ch		
Esd		
Ne		3
Tb	10	
Jdt	2	
Est		
Jb		4
Ps	5	4
Pr		8
Qo		3
Ct		
Sg		1
Si	4	1
Es		13
Jr		10
Lm		1
Ba		2
Ez		14

旧　約　聖　書		
書名	manducare	comedere
Dn		8
Os		2
Jl		2
Am		2
Ab		
Jon		
Mi		2
Na		
Ha		
Ga		
So		
Ag		1
Za		3
Ml		
1 M		
2 M	3	1

一　覧　表 (2)

	新　約　聖　書		
書名	manducare	comedere	edere
Mt	12	4	4
Mc	16	1	
Lc	11	2	5
Jn	14		
Ac	3		
Rm	5		
1 Co	14	2	
2 Co	1		
Ap	2		
Ga		1*	1
Ep			
Ph			
Col			
1 Th			
2 Th	3		
1 Tm		1	
2 Tm			
Ph			
He			
Jc			
1 P			
2 P			
1 Jn			
2 Jn			
3 Jn			
Jede			
Ap	2		

※「書名」の略記号はフランス式に倣った。

2．考察

聖者の「福音書序文」にある[58] 如く，エウセビウスの対観表が細部まで完璧かというと，そうでもない。何故なら，一部において言葉の統一が不十分であるから。つまり，言葉までは直されていないのである。また，本稿に都合の良いことには，それぞれの書に付された，聖者の序文が非常に役立つので，これと対照しながら論を進めていくことにする。

58）両語が異なる文章で使用されているのではなくて，同一箇所の「食べる」が異なる版によってcomedereまたはedereが使用されていることを意味する。しかし，使徒パウロの他の手紙では「食べる」はmanducareに統一されており，manducareが使用されている版が伝存していると確信する。Voir *Nova Vulgata*, p. 2175.

ここでは，ギリシア語新約聖書との比較対照を通して，上記の未解決の問題を含めて，考察を行うことにする[59)]。ギリシア語版「マタイ」では15個所で「食べる」を意味する７つの動詞，ἐσθίω，φαγεῖν，κατέφαγεῖν，τρώγω，συνεστιάω，δείπνέω，βιβρωσκωが使い分けられている。少し，多過ぎるのではとの印象を与えるであろう。と言うのも，後述の旧約聖書の底本となったとされるヘブライ語旧約聖書では，すべての場合「食べる」は，上述の如く，同一語に統一されているので。

兎も角，ここではギリシア語聖書を底本に使用する。ἐσθίωとφαγεῖν が使用されている11箇所でmanducareへの訳語の統一が認められる。それ以外の，edereまたはcomedereが使用されている４例で，manducareが当てられなかった理由を探ってみよう。13章４節「蒔いている間に，ある種が道端に落ち，鳥が来て食べてしまった」では鳥が主語であるうえ，通常の「食べる」の代わりに，「貪る」という特殊な意味の κατέφαγεῖν が使われている。同じく，第24章38節「洪水になる前は，ノアが箱舟に入るその日まで，人々は食べたり飲んだり，めとったり嫁いだりしていた」で用いられているτρώγωは「齧る」を原義とし，第２義に野菜や果物を食べる意味で使用されるとある。これら２例では主語が人間でないこと，特殊な動詞が使用されていることが，manducareが使用されていない理由として挙げられよう。しかし，残る２例に関しては，manducareが使用されていない理由の究明はできなかった。特に，第24章から第26章にかけて，「食べる」を意味する３つの動詞が使用されている。まだ，確信が持てなかった訳者の心理が反映されているのであろうか。最後に，非常に興味深い第26章17-26節を考察しておこう。この章は他の福音書や手紙でも繰り返されていることでもよく知られている。ここでは以下の如く，「食べる」の動詞として，manducareではなくて，comedereが２回使用されている。つまり「弟子たちがイエスのところに来て，「どこに，過越の食事をなさる用意をいたしましょうか」」（17節）と「一同が食事をしているとき，イエスはパンを取り，賛美の祈りを唱えて，それを裂き，弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これは私の体である」」（26節）と。この間，「食べる」に後続して頻繁に出てくる「飲む」の語も３回使用されているが，同一の動詞biberetで通している。この原則違反はどうして起こったのであろうか。訳者に迷いが起きていたのであろうか，それとも版が異なっていたのであろうか。

上述の如く，この章は別の福音書などでも繰り返されているので，そちらを当たることにする。まず，「ヨハネ」（13, 21-30）であるが，上掲の一覧表にある如く，comedereの使用は確認されない。「マルコ」（14,12-21）でも，comedereが使用されている唯一の個所（第４章４節）と合致していない。残るは「ルカ」（7, 14）であるが，manducareに変更されている。つまり，「マタイ」以外の３つの福音書では，す

59）４福音書の中で，最も忠実な逐語訳が行われていると考えられている。高畑時子「ウルガータ聖書。マタイによる福音書」，66頁参照。

べてmanducareに書き換えられていると言うことである。加えて，同福音書の第26章26節と対応している「コリントの信徒への手紙」（1, 11,23-25）でもmanducareが２度も使われている。聖者は迷いから脱して，正道に戻ったということになる。

「マルコ」に移ろう。第２章16節「ファリサイ派の律法学者は，イエスが罪人と徴税人と一緒に食事をされるのを見て，弟子たちに，『どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか』と言った」で，manducareが最初に登場する。この福音書では，唯一の例外を除いて，ἐσθίωとφαγεῖνの訳語としてmanducareが使用されている。唯一の例外とは，「蒔いている間に，ある種は道端に落ち，鳥が来て食べてしまった」とある「マルコ」第４章４節の繰り返しである。また，上述の如く，「マタイ」がmanducareに書き直されている。最初に取り掛かった福音書を終え，肩の力が抜けたのであろうか。訳者が心地よい緊張感を持続させながら，この仕事に取り組んでいた様子が垣間見えるようだ。

しかし，安心するのは早すぎる。「ルカ」に移ると，ここでは「食べる」を意味するギリシア語として，ἐσθίω（と接頭辞が付いたもの），φαγεῖν（と接頭辞が付いたもの），δείπνέωが使用されている。しかし，再び迷いが出てきている。まず，既出の動詞「食べる」に，前者は「一緒に」と「食べる」が合わさった「一緒に食べる」συνεσθίωとδειπνήσωの２語が新たに加わる。「食事をとる」を意味する後者は「『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め，私が食事を済ますまで給仕してくれ。お前はそのあとで食事をしなさい』と言うのではなかろうか」との文章の中で使われていて，それには同じ意味のcenareが当てられている。comedereに関しては，この福音書では，既出の「マタイ」（13, 4）が繰り返されているほか，「さあ，これから先何年も生きて行くだけの貯えができたぞ。ひと休みして，食べたり飲んだりして楽しめ」（12, 19）との文章で使用されている。当該福音書では，「マタイ」（26, 21）に出てきているedereが５回用いられていることが注目される。まず，「マタイ」（24, 49）とは異なって，当該福音書の第12章45節「しかし，もしその僕が，主人の帰りは遅れると思い，下男や女中を殴ったり，食べたり飲んだり，酔うようなことになるならば」）ではedereが使用されている。同じことは，「マタイ」（25, 35）と当該福音書（17, 27）でも起きているし，後者の個所に続く節でもedereが使用されている。幾つかの福音書でcomedereがmanducareに置き換えられる例は既に指摘しておいたが，edereによる書き換えは初めてである。最後に，これら３語が使用されている，興味深い第12章を見てみよう。まず，他の福音書には見いだせない，上掲の19節でcomedere，22節「イエスは弟子たちに言われた。『だから，言っておく。命のことで何を食べようか，体のことで何を着ようかと思い悩むな』」で，「マタイ」（6, 25）と同様のmanducare，上掲の45節では，「マタイ」（６, 25）のmanducareとは異なって，edereが使用されている。ギリシア語原本では φαγεῖν と ἐσθίω の異なる動詞が使用されており，当該章では少し混乱が起きていることを認めなければならないであろう。繰り返すが，聖者の頭にあるのはmanducareと

comedereの対置図式であって，edereはその圏外にある。とは言うものの，苦悩していることの証拠であることには間違いない。基本はmanducareとcomedereが重ならないことで，迷いが出るか，別物と判明している場合はedereを選ぶこともあったと考えられる。

福音書の最後を飾る「ヨハネ」でmanducareが使われているのは第４章と第６章の２章である。ここで使用されているギリシア語「食べる」は既出のφαγεῖνとτρώγωの２語に，新たに βιβρωσκω が加わっている。特に注目すべきはこれら同義と見なされる３語が12回使用されている第６章である。第49節から第58節にかけてφαγεῖνとτρώγωが８回出てくるが，前半に φαγεῖν を使い，中間には τρώγω を配置し，最後は最初の動詞に戻っている。つまり，ギリシア語聖書の作者は同一動詞の繰り返しを避け，文章にリズム感を与えるため別の同義語を挟み，再び元の動詞へ戻っている。しかし，聖者はこの文体上の配慮を無駄と判断し，manducareの１語で乗り切ったのである。これと類似のことが第13章21－30節で起きている。この出来事は「マタイ」（26, 20-25）の有名な「過越の食事をする」の場面で,「夕方になると，イエスは12人と一緒に食事の席に着かれた。一同が食事をしていると，イエスは言われた。『はっきり言っておくが，あなたがたのうちの一人が私を裏切ろうとしている』」とある。ここではcomedereとedereが使用されているが，それは「マルコ」（14, 27-31），「ルカ」（22, 31-34），「ヨハネ」（13, 21-30）では共通してmanducareに書き換えられている。翻訳者は新約聖書中の「食べる」を意味する語はすべてmanducareで統一するとの，自身の方針に自信をもったに違いない。

以上，４福音書を見てきたが，聖者は書簡の中で，上記の順序で福音書の訳業を終えたと述べており，そのことは「ヨハネ」において示された，新約聖書の「食べる」にはmanducareを当てるという強い意志となって表れている。更に，新約聖書に含まれるこれら４福音書以外の諸書に関しても，直接的証言はないが，この一覧表は最後まで聖者の手が入っていたこと，または大原則に従って訳業が進められたことを明示している[60]。上記の考察は言葉に重点が置かれているが，内容よりも言葉に重きを置くとの翻訳者としての基本姿勢[61] が表現されたものにもなっている。勿論，厳密に言えば，解明すべき点が幾つか残されてはいるが。

60）*Praefatio Hieronymi in quatuor Evangelia*, Migne *PL*, 29, col. 525-530. 邦訳としては，加藤哲平，前掲書，259-262頁参照。

61）J. N. D. ケリーは聖者以外の１人または複数人の作と見なす。Voir Id., *Jerome*, p.162. 他方，新約聖書の４福音書を除く，使徒行伝，書簡，黙示録の改訂に聖者が関与したことを示す証拠がないことから，聖者の修道院仲間であったシリア人ルフィヌスの仕事とする見解が出されている。しかし，一覧表は大原則の貫徹を証明しており，ルフィヌスの作とした場合，彼はこの聖者の方針を熟知していたことになる。加藤哲平，前掲書，144頁参照。

8．旧約聖書

1．予備的考察

考察は第１部の「そよ風」，第２部の「突風」，第３部の「無風」の３部に分けて進められる。訳業の「そよ風」の部分は「創世記」から始まり，最後まで異変は確認されない。「出エジプト記」に入り順調に進んでいくが，最後の少し手前で１度限りではあるが，manducareの闖入という小さな異常が起きている。その後，「出エジプト記」は正常に戻り，「レビ記」に入るが，異常は発生していない。「民数記」も順調に始まるが，comedereの源であるedereの使用が１度だけ確認される。「出エジプト記」での異変からすれば，誠に軽微なものである。「申命記」も恙なく終わり，「食べる」の語の使用が確認されない「ヨシュア記」がそれに続き，「士師記」も無事終わり，再び使用が確認されない「ルツ記」の後にくる「サムエル記」上で，２度目のmanducareの使用に遭遇する。その後「サムエル記」下，「列王記」上・下から，使用が確認されない「歴代誌」上・下と「エズラ記」を素通りして，「ネヘミヤ記」まで，大原則は聊かも侵されていない。

しかし，第２部の「突風」に移ると，状況は一変する。その第１節からmanducareが２度にわたって使用される「トビト記」が大前提をぶち壊す。全14章のほぼ半分で違反が繰り返されている。一体何があったのか。これは偽書，つまり聖者の手を経ていない書，または差し替えられた書だったのであろうか。この謎を解く鍵は聖者が友人２人に宛てた書簡にあるのかもしれない。この違反は次の「ユディト記」にも及んでいる。この２書は旧約聖書続編に含まれるものですが，続く同じ仲間の「エステル記」，そして「ヨブ記」では従来の静けさを取り戻します。しかし，次の「詩編」では再びmanducareが乱入して秩序を乱す。この混乱をぴしゃりと終わらせたのが第３部の「無風」の「箴言」で，「伝道の書」を経て，「食べる」の語の使用のない「雅歌」を通り越して，「知恵の書」まで凪が続く。しかし，続く旧約聖書続編に含まれる「シラ書」において最後の混乱が襲う。ここではmanducare，comedere，edereの３語が入り乱れる。しかし，これは最後のあがきとも見て取れる。何故なら，次の「イザヤ書」では全11章において準則が貫徹されているから。更に，これに続く「エレミア書」，「哀歌」，「バルク書」，「エゼキエル書」，「ダニエル書」，「ホセア書」，「ヨエル書」から最後の「マカバイ記」２に至るまでの書において，乱れは一切生じていない。

以上，一覧表を見てきたが，難所は次の４箇所，旧約聖書続編に含まれる「トビト記」，「ユディト記」，「シラ書」の３書と「詩編」に絞られる。しかし，別の疑問も湧き出てくる。それは作品の順序に関するもので，この配列は正しかったのであろうかという疑問である。これら４つの作品とそれらの前後の作品との関係に不都合は生じていなかったのだろうか。

2．考察

聖ヒエロニュムスが活躍した時代，広く使われていた旧約聖書は１つではなく，大きく分けてギリシア語版とヘブライ語版の２つがあった[62)]。旧約聖書の翻訳にはヘブライ語版を底本としたと聖者自身が言っているし，今日の研究者もそれに同意している[63)]。しかし，果たしてそうであったのか。上述の如く，聖者のラテン語版では「食べる」は１語に完全には統一されていない。その原因が訳者自身のみならず，底本にもあるとすれば，聖者が使った底本が問題になってくる。現行のヘブライ語版ではほぼ１語，つまり動詞 לוכאל に統一されていると断言できる[64)]。これに対して，ギリシア語版新約聖書でも見てきた如く，素読した限りではあるが，ギリシア語版では１語に統一されていない。つまり，聖者はギリシア語版を底本に使用したと考えれば，説明がつく。しかし，これを認めることは聖者の言葉はまもちろん今日の学説とも反することになる。ここでは旧約聖書のギリシア語版も使って，上記の逸脱の原因を探ることにする。

上述の如く，旧約聖書聖はcomedere，新約聖書はmanducareの準則に従って，聖ヒエロニュムスは訳業を始める。「創世記」の天地創造から「初めに，神は天地を創造された。地は混沌であって，闇の深淵の面にあり，神の霊が水の面を動かしていた。神は言われた。『光あれ。』」と書き始められる。その２節に「食べる」の言葉が出てくる。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし，善悪の知識の木からは，決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」とある。人間が知識の木を食べる前の場面で，ここでは「食べる」の意味で，comedereが３回使用されている。これに続く３節が有名な「蛇の誘惑」の話で，人間の苦しみの始まりが語られている。蛇は女に言います。「『園のどの木か

62）Epist. 57, chap. 5, dans Migne, *PL*, 22, col. 571 : « Ego enim non solum fateor, sed libera voce profiteor, me in interpretatione Graecorum, absque Scripturis sanctis, ubi et verborum ordo mysterium est, non verbum e verbo, sed sensum exprimere de sensu ». 邦訳としては，高畑時子「ヒエロニュムス著「翻訳の最高種について」，153-171頁がある。

63）Kelly, J. N. D., *Jerome*, p. 86,158-159; 秦剛平『乗っ取られた聖書』（学術選書020）京都大学出版会，2006年，第４・６章他；加藤哲平，前掲書，第１部３章1-4節他；片山寛，前掲論文，３頁参照。

64）Kelly, J. N. D., *Jerome*, p. 159-163；加藤哲平，前掲書，第１部３章５他。しかし，これには異論が出されている。聖者のヘブライ語能力に関する疑念は300年以上も前から出されている。それは聖者の能力を完全に否定した，1986年のP. ノタンの研究によって頂点に達するが，その後の傾向は堅実な文献学的研究へとシフトしている。本稿も，このような疑念を肯定するような事実を確認していない。これまでの批判は全体批判ではなくて，翻訳技術などの部分的批判に終始し，禁欲者としての偉業，その前提となる基本姿勢という側面が軽視されているように思われる。このような批判に対しては，「木を見て森を見ず」の感を強くする。Voir Nautin, P., “Hieronymus”, dans *Theologische Realenzyklopädie*,15, 1986, p. 304-315; Burstein, E., La compétence de Jérôme en hébreu. Explication de certaines erreurs, *Revue des études augustiniennes*, 21(1975), p. 3-12 ; Gryson, R., Saint Jérôme traducteur d'Isaïe. Réflexions sur le texte d'*Isaïe* 14, 18-21 dans la *Vulgate* et dans l'*In Esaiam*, dans *La Muséon*,104, 1991, p. 57-72 ; Newman, H. I., How Should We Measure Jerome's Hebrew Competence ? , dans Cain, A. and Lössl, J., *Jerome of Stridon. His Life, Writings and Legacy*, Farnham, 2009, p.131-140; 片山寛，前掲論文，7-10頁；加藤哲平，前掲書，100-108頁参照。後掲の執筆後記にある如く，本稿はこれまでの聖ヒエロニュムス研究を知り尽くした結果としての成果ではない。筆者の研究が偶然聖ヒエロニュムス研究とただ一点で交叉した結果に過ぎない。本稿での研究方法も，同研究史において類例のないものである。従って，網羅的な参考文献は必要なく，既存研究の大きな流れを知るためのもので十分と考える。

らも食べてはいけない，などと神は言われたのか。』と女に言いました」から始まり，「あなたは額に汗してパンを食べ，ついに土に帰る。」まで，合計13回comedereが使用される。それに続く合計７章で使用された後，第45章18節「『わたしは，エジプトの国の最良の産物を与えよう。あなたたちはこの国の最上の産物を食べるがよい』」が最後であるが，この章では「食べる」はすべてcomedereに統一されている。続く「出エジプト記」では，第２章20節「なぜ，そのかたをおいてきたのか。呼んできて，食事をさしあげなさい」で，comedereが最初に使用される。第10章で１度使用された後，第12章の７節「その血を取って，小羊を食べる家の入り口の二本の柱と鴨居に塗る」，９節「肉は生で食べたり，煮て食べてはならない」，11節「それを食べるときは，腰帯を締め，靴を履き，杖を手にし，急いで食べる」などで，６度も使用されている。しかし，同書の第32章６節で，唯一の例外として，manducareが使用される。ヘブライ語版で確認すると，常用されている語 לוכאל がこの書でも使用されている。準則はこの語にcomedereを当てており，manducareの使用は考えられない。他方，「70人訳」ではギリシア語 φαγεῖν が当てられているうえ，それが新約聖書で使われている場合，このギリシア語には通常manducareが当てられている。従って，この個所に関しては，旧約聖書の底本にヘブライ語版が使用されたとする見解は通用しないことになる。

以上，「創世記」から「ネヘミヤ記」までの13書において，２度を除いて，ヒエロニュム準則は厳守されている。但し，若干の例外の原因は不明のままであるが。しかし，「トビト記」に入って，何の予兆もなしに，この準則は突如破られる。その前に置かれている「ネヘミヤ記」では準則違反は皆無である。何が起きているのだろうか。この異変は，同じく旧約聖書続編を構成する，次の「ユディト記」まで続く[65]。この両書には，密接な関係があったのだろうか。

「トビト記」と「ユディト記」の両書において使用されているのは，新約聖書に当てられることになっているmanducareである。「トビト記」では実に合計６節10回も，「ユディト記」でも１節２回使用されている。底本として使用されたと言われているヘブライ語版を当たってみよう。両書の該当箇所では他の書と同様に，すべて同一の動詞 לוכאל が使用されており，原因はベブライ語底本にはないということになる。念のために，ギリシア語版を当たってみよう。「トビト記」では動詞 φαγεῖν, ἐσθίω, δείπνέω,「ユディト記」では φαγεῖν が当てられている。注目すべきはこれらの動詞の中に，新約聖書でmanducareが当てられたギリシア語動詞 φαγεῖν が含まれていることである。となると，聖者はこの個所だけギリシア語版を優先させたのであろうか。その理由は何か。しかし，理由は特に見当たらない。

幸いなことに，聖者はこれら２つの版の翻訳に関して，書簡を残してくれている[66]。それはヒエロニュ

65）ここで参考にしたヘブライ語版聖書に関しては，前出註51参照。
66）聖者による両書の翻訳版が伝存していないことから，ヴァティカンの編集委員会も両書の底本の確定に苦慮していて，その狼狽は編集報告書と脚注にも表れている。Voir *Nova Vulgata Bibliorum Sacrorum editio*, p. XVI・XVII.

ムスが翻訳の依頼人に宛てたもので，この異変の謎を解いてくれるに違いない。それによると，この２つの書に関しては，底本として使用したのは，これまでのヘブライ語版ではなかったようである。何故なら，書簡にはカルディア語版を底本として使い，同語とヘブライ語を知っている者にそれをヘブライ語に翻訳してもらったものを，最終的に聖者がラテン語に翻訳したと書かれている。更に，聖者はこれら２つの書の翻訳には乗り気でなく，聖書に加えたくなかったとも述べている。提出されたヘブライ語訳が同聖者が読み慣れたヘブライ語版と使用言語において同一でなければ，聖者は準則の適用に大いに迷ったことであろう。加えて，本人は旧約聖書に加えたくなくないと思っていたのであれば，準則の意識は薄らいだことであろう。こうして，この荒波もどうにか乗り切ることができた。反対に，「瓢箪から駒」の如く，この２つの書によって，筆者の仮説の正しさが証明されたことになる。残る難所は「詩編」と「シラ書（集会の書）」の２つである。「新ヴルガータ」に収められた「詩編」に関するこの種の考察には，注意が必要である[67]。同書の序文[68] によると，色々な版を参照したとあるうえ，聖者の言によると，当時「詩編」の版として「ローマ詩編」，「ガリア詩編」，「ヘブライ語詩編」の３種があったようである[69]。

さてと，「詩編」では，新約聖書のために用意されていたmanducareの使用が先行する。第50章13節「わたしが雄牛の肉を食べ，雄山羊の血を飲むとでも言うのか。」で，それは使われている。「70人訳」ではφάγομαι とある。第78章でも同一の動詞が使われ，最後の「あなたがたが早く起き，遅く休み，辛苦のかてを食べることは，むなしいことである」とある第127章２節ではmanducareにギリシア語 εσθίοντες，次章２節「あなたは自分の手の勤労の実を食べ，幸福で，かつ安らかであろう」では，同じく φάγεσαι が当てられている。底本にはほぼ同じ文章が確認され，そこに原因を求めることはできない。考えられることは，この２つの動詞は新約聖書でmanducareが当てられた動詞で，そこからの闖入として処理できるかもしれない。他方，４箇所で使用されているcomedereであるが，そのうちの２箇所，第79章７節「彼らはヤコブを滅ぼし，そのすみかを荒らしたからです」，第105章35節「無数の若いいなごが来て，彼らの国のすべての青物を食いつくし」において，「食べる」ではなくて，「貪り食う」を意味する κατέφαγεῖν が使用されている。

論争に積極的に深入りする気は毛頭ないが，邦訳の詩編第141章４節で興味深いことが起きている。日本聖書協会発行（1979年）では「また彼らのうまき物を食べさせないでください」となっているが，

67）*Praefatio Hieronymi in librum Tobiae*, Migne, *PL*, 29, col. 23-26 ; *Praefatio Hieronymi in librum Judith*, *ibid*., col. 37-40. 邦訳としては，加藤哲平，前掲書，313-315頁参照。

68）「新ウルガータ」に収められた詩編の出典に関しては，Voir *Nova Vugata Bibliorum Sacrorum editio*, p. XVIII-XXI.

69）*Praefatio s. Hieronymi in librum Psalmorum juxta herbaicam veritatem*, Migne, *PL*, 28, col. 1123-1128. 邦訳としては，加藤哲平，前掲書，276-278頁参照。

共同訳（1989年）では「彼らの与える好餌にいざなわれませんように」となって，後者から「食べる」が消えてしまっている。両者は同じ版の聖書を底本に使っていたとすれば，「聖書の言葉は神の言葉」であることから，これは明らかに改竄である。但し，底本が異なっていたとすれば，両者とも正しいことになるが。本稿が底本とする「新ウルガータ」では «et non comedam ex deliciis eorum»と，確かに動詞「食べる」があり，邦訳旧版の聖書が正しかったことになる。しかし，新版が改竄したかというと，そうではない。「七十人訳」では« και ου μη συνδοίασω μετά των εκλεκτών αυτών »とあって，「食べる」を意味する動詞が見当たらないのである。つまり，少なくともこの個所に関しては，共同訳は「七十人訳」を底本に使っていたことになる。ここで聖者の登場となる。旧約聖書の改訂に際して，彼はギリシア語版旧約聖書とヘブライ語版聖書のどちらを底本に使ったのかで論争が起きている。ヘブライ語版に「食べる」に関する動詞が出てくれば，聖者はこの版を底本に大事業に挑んだことになる。ヘブライ語版旧約聖書を当たってみよう。確かに，そこにはヘブライ語の לוכאל「食べる」が出てきている。聖者は，確かに，ヘブライ語版旧約聖書を常に脇に置いて翻訳の仕事をしていたのである[70]。

最後に残されたのが，旧約聖書続編に含まれる「シラ書」である。「新ウルガータ」の解説によると，この書に関して，大きく分類して，古ラテン語版，2つのギリシア語版，ヘブライ語版，シリア語版が伝存するが，古ラテン語版を底本として使用し，不備を他の版で補ったとある[71]。従って，聖者の手が加わっていなかったことから，この書に関しては，これまでと同じ仕事はできないことになる。しかし，この書の考察は，聖者の翻訳が如何に際立ったものであったかを知る上では，恰好の材料になろう。本書では，「食べる」を意味する言葉として，manducareが4回，comedereが1回，edereが3回出てくる。このような1書における3語の使用は異常であり，聖者の準則に沿ったものではない。「新ウルガータ」版によると，同書第31章19節でmanducareの使用を確認する。これに相当する文章は「七十人訳」にも新共同訳―研究者にとって，これを使用するには，非常な困難を伴う。何故なら，異なる版の聖書が，出典の明記なしに，底本に使用されているから―にも見いだせない。しかし，ヘブライ語版旧約聖書の同一箇所においては，確かに，これと同一の文章が確認される。

知らぬ間に，論争に引き込まれてしまった。話を本来の流れに戻そう。「シラ書」第6章2-3節「自分勝手な思いで高ぶるな。さもないと，暴れる雄牛のように力尽きる。お前は葉を食い尽くし，実を台なしにし」では，κατέφαγεῖν が使用されている。「新ウルガータ」（20, 18）には« qui enim edunt panem illius, falsae linguae sunt. Quoties et quati irridebunt eum ! »とある。邦訳すると，「彼のパンを食べる者たちは偽りの舌を持つ者たちです。彼らは数えきれないほど彼を嘲笑することでしょう」となるが，

70）Kelly, J. N. D., *Jerome*, p. 89, 158-159, 285-286 ; 加藤哲平，前掲書，144-146頁参照。
71）Voir *Nova Vugata Bibliorum Sacrorum editio*, p. XXII-XXIII.

この文章は「七十人訳」にも邦訳にもない。同じく「新ウルガータ」(24, 28) に«Qui edunt me, adhuc esurient; et, qui bibunt me, adhuc sitient»とあるが，邦訳では同章21節に配置されている。明らかに両者の底本は異なっていたことになる。同じく，「食べる」edereが使用されている同第45章26節も「七十人訳」にも邦訳にも見当たらない。

以上の考察からは，旧約聖書に関しては次のような結論に至るであろう。既述の如く，準則は新約聖書よりも旧約聖書でよく守られていたが，それでも「トビト記」,「ユディト記」,「詩編」,「シラ書」で，異常が認められた。前記２書と「シラ書」での異変は，聖者の手を経てないことで解決された。と同時に，こられ３書によって筆者の仮説の正当性が一層確かなものとなった。残る「詩編」に関しては，一部は同時進行の新約聖書からの影響が想定されたが，その他の異常の原因は不明のままである。

最後に，同様に重要な，聖書中の諸書の順序の問題を指摘しておこう。何故なら，上述した問題を含んだ「ユディト記」の後に続く２書「エステル記」と「ヨブ記」では聖者の準則は守られているが，この後に異常な状態が確認される「詩編」が来ている[72)]。「詩編」に続く「箴言」,「コヘレトの言葉」,「雅歌」,「知恵の書」ではしばらくの間準則遵守が続くが，その後に最後の混乱が起きている「シラ書」が来ている。聖者は「ソロモンの書序文」で，「箴言」,「コヘレトの言葉」,「雅歌」を「七十人訳」を底本に改訂を行っている[73)]。従って，この３書ではヒエロニュムス準則は遵守されている筈である。更に，同序文によると，聖者はそれに続く「知恵の書」と「シラ書」に関しては，聖書正典に含まれないことを理由に，改訂を放棄している[74)]。「知恵の書」では「食べる」が一度使用され，準則通りに処理されている。しかし，例が僅少であるため，これをもってこの書も準則に従って翻訳が行われたと断言することはできない。他方，「シラ書」では「食べる」に３語が当てられており，前後の書と比較しても，異常である。聖者がこの書の改訂に加わっていなかったとすれば，この書における準則違反はそれに沿って処理できることになる。また，聖書内のこのような諸書の配列にも当然疑問が生じてくる。何故なら，聖書翻訳・改訂の責任者である聖者であれば，こういう配列はしなかったと考えられるから。聖者の準則を含め，内容を熟知していない者がこれを行ったとしか考えられない。これへの答えは筆者の能力を超えてしまっているので，今回は指摘するに留める。

聖者が準則の存在に気づいた時期を特定するのを忘れていた。聖者は新約聖書改訂時に底本としてギリシア語版を使用したとされているが，同語は語意の微差を尊重する言語として知られており，ギリシ

72）*Praefatio Hieronymi in librum Psalmorum juxta herbaicam veritatem*, Migne, *PL*, 28, col. 1241-1244 ; 加藤哲平，前掲書，302-303頁参照。
73）*Praefatio Hieronymi in libros Salomonis juxta LXX interpretes*, Migne, *PL*, 29, col. 403-404 ; 加藤哲平，前掲書，27頁参照。
74）同上参照。

ア語からの着想は考えられない。しかし，同時に古ラテン語版も併用したと言われており，ここでは主としてmanducareが使用されていて，この版からの着想は十分考えられる。しかし，上で見てきた如く，「マタイ」ではmanducare以外に，esco, comedere, edereも使用されており，まだ迷いが出ている。次の「マルコ」ではこの迷いが吹ききれたかと思われたが，次の「ルカ」では第１作に戻ってしまっている。従って，準則の一方の確立は次の「ヨハネ」の改訂時，つまりローマ教皇ダマスス１世に完成稿が提出された384年頃となる。これが認められれば，準則の完成は旧約聖書改訂のために，底本とした使用されたヘブライ語版に接し，そこで「食べる」が終始同一語で訳されているのを知った時，つまり391年となる。しかし，その芽生え，つまり準則の存在を漠然と意識し始めたのは，ローマ教皇ダマスス１世から聖書の改訂・翻訳を依頼された382年よりも前であったと考えられる。

しかし，突然ですが，ここで聖書研究者に変身すること，否，聖書研究者の真似事をすることをお許し願いたい。上述の「トビト記」について，１つの疑問が頭から離れない。それはこの書でmanducareの使用という禁じ手が10回も繰り返されていることです。この版を採用すること自体信じがたいことです。聖者の準則を知らない者が行ったに違いない。短い書にも拘らず，これほど多くの誤りが確認されることは他には起きていない。翻訳に気乗りしなかったとか，酒を飲んでいたとか，女性に恋をしていたとか，如何なる言い訳も許されない。聖者は神の言葉の伝達者であることを常に強く意識していた。最近の研究でも，聖者が翻訳した「トビト記」の版は未確定とある[75]。「新ウルガータ」は，一体どの版に従っているのか。幸いなことに，筆者の手許に，イタラ版の「トビト記」がある。イタラ版聖書とは２世紀にラテン語訳された新約・旧約聖書を指す。ここで使用されているmanducareの初出も２世紀のことである。「トビト記」を「新ウルガータ」とイタラ版の間で比較してみると，manducareは両者のほぼ同じ個所で使用されている[76]。両者とも，古典期の作家たちが常用していたcomedereの使用は認められない。つまり，イタラ版の「トビト記」は古典期の作家の作品に通暁していなかった者の手になるものと言える。　以上から，「新ウルガータ」に収められている「トビト記」は聖者の匂いが全く感じられない，素性不詳の作品と言える。

９．旧約聖書と新約聖書の関係

「はじめに」で「聖書の言葉は神の言葉」とする考えが古代末期からキリスト者の常識であったと述べた。「序論」では，人間の基本的行為である「食べる」を含む諸語のもつ特徴について論じた。本論

75）加藤哲平，前掲書，313-314頁，註３参照。
76）Neubauer, A., *The Book of Tobit*, Oxford, 1878, p. LXIII-XC.

では，ラテン語版聖書に関して，旧約聖書ではcomedere，新約聖書ではmanducareが使用されていることが詳論された。

他方，聖書学のテーマとして，新約聖書と旧約聖書の一体化の試みが古代末期から営々と続けられている。今日では両者を一体的に捉えることが常識となっている。この流れに従えば，ある行為を示す言葉も両方で使用されていることになる。例えば，「飲む」を例に取ると，旧約聖書の「創世記」（19,33）に「娘たちはその夜，父親にブドウ酒を飲ませ，姉がまず，父親の所へ入って寝た。父親は，娘が寝に来たのも立ち去ったのも気づかなかった」とあって，動詞「飲む」にbibereが当てられている。新約聖書でも「飲む」の語に，同じくbibereが当てられている。

これらの例に倣えば，「食べる」の動詞も同じでなければならなくなる。しかし，上述された如く，聖ヒエロニュムスの手になる翻訳版では，上記の如く，旧約聖書では「食べる」の語にcomedere，新約聖書ではmanducareが当てられている。例えば，旧約聖書で神が発した言葉として，「創世記」（2,16-17）に「主なる神は人に命じて言われた。園のすべての木から取って食べなさい。ただし，善悪の知識の木からは，決して食べてはならない。食べると必ず死んでします」，「レビ記」（7,19）に「汚れたものに触れた肉は一切食べてはならない。焼き捨てねばならない」とあって，そこではすべてcomedereが使用されている。これに対して，新約聖書でイエスが発した言葉として，「マタイ」（6,25）に「だから，言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと，また自分の身体のことで何を着ようかと思い悩むな」，「マルコ」（6,37）に「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」，「ルカ」（10,8）に「どこかの町に入り，迎え入れられたら，出される物を食べ，その町の人々をいやし，また『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい」，そして「ヨハネ」（4,32）に「わたしたちにはあなたがたの知らない食べ物がある」とあるが，これらのすべてでmanducareが使用されている。同一神家族内で，人間の基本行為の１つである「食べる」に相当する言葉が父と子の間で異なっていたことになる。

ここで，紀元１世紀のあるローマ人貴族の食卓での会話を再現してみよう。

父　「イエス。ご飯だよ。早く食べcomedereなさい。」

子　「分かりました。直ぐ喰いmanducareに行きます」。イエスは今読んでいた本に夢中で，返事だけで済ませました。

父　「イエス。何回言わせるのか。早く食べcomedereに来なさい」。

子　「分かりました。今，喰いmanducareに行きます」。

父　「イエス。その新しい言葉はどこで覚えたのか。お父さんは，何日か前に汚らしい笑劇場の前を通った時，そこから出てきていた酒瓶を片手に持った男が「これから旨いもんでも喰いmanducareに

行くか」と大声で叫んでいたし，また別の日には派手な赤い服を着た厚化粧の女性が「そこの紳士，何か喰いmanducareに行かない」と言ってきた。

母　「そうよ，イエス。お父様の言う通りよ。「喰うmanducare」など下品な言葉を使ってはいけません」。イエスは何も言わなかった。

しかし，その後もイエスは「喰うmanducare」と言い続け，死ぬまで父と同じ言葉を使うことはありませんでした。貴族の家族の中で，「食べる」を意味する言葉が異なっていたのは，父は子に自分が使う言葉とは異なるものを教えていたのか。これで意思の疎通はできていたのであろうか。もし神である場合「できていた」と言えば，それで済む。しかし，「食べる」に関してだけ，父子の間で使用する言葉を変えなければならなかったのかとの説明は容易ではない。「食べる」だけは別で，他はすべて同じであったと答えるかもしれない。しかし，その場合も，どうして「食べる」だけなのかと聞かれるだろう。また，イエスだけは養子として受け入れた別家族に属し，そこでは「食べる」にmanducareが使われていたとの答えが返ってくるかもしれない。このように，疑問は次々と湧いて，結論に到達することはない。

結局，父と子イエスは同一家族を構成していたとするのが自然である。そのための解決策は２つある。１つは新約聖書中の「食べる」を意味する語は，旧約聖書と同じにするために，manducareをcomedereに書き換えること。今１つは旧約聖書と新約聖書を切り離し，全くの別物とすること。手っ取り早いのは前者の方である。しかしそうなると，聖ヒエロニュムスの準則も意味を持たなくなるのみならず，聖書の本意を歪めた張本人として聖者は法廷で裁かれ，最も重い刑罰が下されることになる。しかし，問題はこれだけではない。例外的にではあるが，「マタイ」（26,26）の「取って食べなさい。これは私の体である」の如く，イエスは父と同じように，edereを使っている。イエスはバイリンガルであったのか。イエスはどこでedereが「食べる」を意味することを知ったのか。言葉－特に生命に係わる基本語－は，通常，家族内で習得されることから，当然，父がその言葉を使うのを聞いていたからであろう。イエスは，小さい時は，いつもedereやcomedereを聴いていたことになる。それでは，いつ頃から，イエスはedereやcomedereよりもmanducareに愛着を覚えるようになったのだろうか。何が契機になったのであろうか。上記の寸劇に従えば，小学校から家に帰るときだったことになる。

否，それだけではない。旧約聖書に登場する神と人物はedereやcomedereを使い，新約聖書に登場する神と人物はmanducareを使っていたとなっている。しかし，こういう世界は想像しにくい。更に，今のところ，異なるのは「食べる」に関する言葉－飲むbibereは常に同じである－だけで，残りはすべて共通であったとの前提そのものが成立しない。どう見ても，旧約聖書と新約聖書を一体化する試みは神が人間に課した解決不能な問題としか思えない。

最後に，この問題はラテン語版聖書に固有の問題であることを断っておかねばならない。何故なら，これはラテン語に起きた出来事と関係しているからである。不運にも，ローマ世界において，西暦１世紀から２世紀にかけての言語革命によって，「食べる」を意味する言葉がそれまでのedereまたはcomedereからmanducareに移ってしまったからである。

10. 結論

以上で，「聖ヒエロニュムスの聖書」の判別をめぐる考察を終える。ローマ法王庁で組織されてきた歴代のウルガータ編集委員会は聖ヒエロニュムスの聖書が如何なる準則に従って編纂されたかを知らずして，何百年も「ウルガータ」の編纂を繰り返してきたことになる。特に，旧約聖書に含まれる書に関しては，聖者が直接手を加えた書においてヒエロニュムス準則が破られ，反対に聖者の手が加わっていない書においてそれが厳守されているという不思議な現象が起きている。これは大きな過ちであり，可能な限り速やかに改善されなければならない。ローマ教皇庁は聖者によって直接的または間接的に渡された版に基づいて編纂を行ってきたことであろう。しかし，上述の如く，聖者はウルガータに含まれるすべての書を自身で編纂・改訂したのではなかった。また，版を重ねるに従って，誤りも増減していったことであろう。歴代の委員会は聖者が用いた，旧約聖書はcomedere，新約聖書はmanducareという準則を知らないまま，編集を続けてきたのである。何もなければ，永遠にこの誤った状態は続くであろう。信者は何も知らずに，聖書に含まれる言葉は神の言葉として，間違った聖書を読み続けることであろう。しかし，実際には，神の言葉は信者には正確には届いていなかった。信者にとってこれ以上の不幸はない。新約聖書の２つの福音書で確認される小さな，または不確かな離反は後回しにするとして，差しあたり，聖者の手を経ていないか，聖者の準則から直接的または間接的に逸脱している旧約聖書の「詩編」，「トビト記」，「ユディト記」，「シラ書」，「マカバイ記」2の改訂が必要となろう。また，本稿で初めて提示されたヒエロニュムス準則が認められるならば，これまでの大小の論争の一部は無益だったことになり，反対にこれまで一顧だにされてこなかった問題が大きな重要性をもつことになるであろう。

聖ヒエロニュムスは聖書において，美よりも正確さを追求した結果，完全無欠な文章を作り上げることができた。現代語では国の内外を問わず，「食べる」は一語で統一されてしまっている。ギリシア語聖書では「食べる」を表すのに10語近くが使用されている。古典期のローマ文学と同様，それはいわば人間性，感性，叙情性が溢れる文学作品に譬えられる。他方，ラテン語聖書「ウルガータ」とそれが手本とするヘブライ語旧約聖書では１語に限定してしまったのである。ヘブライ語の聖書では，「食べる」に関して共通した言葉が使用されている。これに対してラテン語聖書では別々の動詞が使用されている，

つまり，新約聖書と旧約聖書は別々の作品になっている。神は「食べる」と言うとき，２つの語を使い分けていたことになる。果たして，これは神の言葉と言えるのだろうか。また，聖書には古典期の作品と通じるものがない。古典期の作品と共通するものがないのである。つまり，これは古典期のどの文学作品にも共通しない，怪物である。このような作風は聖ヒエロニュムスの他の作品でも見られない。異端を防ぐためにここまでしなくてはならなかったのである。聖書はラテン語で書かれたもののなかで，類例をもたない作品である。逆に言えば，神の言葉であるために，類例がないことになる。異端の発生を防ぐあまり，人間性，感性，叙情性を失ってしまったとの批判が当然のことと予想される。しかし，訳者はこれらすべてを承知の上で訳業をやり遂げたのである。

さて，聖者のヘブライ語能力に関する論争に触れておこう。若い時代聖者はギリシア・ラテン文学を貪るようにして読み，表現の多彩さに驚かされたにちがいない。しかし，後に宗教者としてヘブライ語の旧約聖書を読み，表現の簡潔さ（「ヘブライ的真理」）と出会ったのである。真理の教え，「神の言葉」の表現は，二義の排除の観点からも，ここにあると悟ったに違いない。ヘブライ語の旧約では「食べる」を意味する動詞は１つであるにも関わらず，すべての個所において過不足なく表現されている。聖者はギリシア・ラテン文学の対極にある文章がもつ別の美しさ，極限まで削られた，強靭な文章と出会い，そこに異端を生まない聖書の真の姿を見出したのではなかろうか。

「ヒエロニュムスの準則」に見る，聖者によるこのような真理への覚醒はいつごろ生まれたのであろうか。一覧表を見ると，旧約聖書でよりはっきりと，またはほぼ完全な形で表れている。これは聖者が大事業の途中で目覚めたことを意味しているのか。そうではない。４つの福音書の最後に置かれている「ヨハネによる福音書」でこの準則は完成しているが，既にこの大事業の開始から，聖者の頭の中にこの考えがあったと確信する。旧約聖書と新約聖書との関連性に関しては，動詞「食べる」の使用はその存在を完全に否定している。

聖書は，神の言葉である以上，人智のみによって何度も書き換えられる類のものではない。変更があるとすれば，少なくとも，改変の大義を公表し，信者の同意を得る必要がある。最後に，神は万物の創造主であるとするならば，「汝殺すことなかれと」と説く一方，金持ちを死の恐怖でもって苦しめ，彼らを表すラテン語divesをも死語に追いやった責任は小さくないことを付記しておく。

2021年３月３日脱稿

批判に応えて

草稿の段階で，一部の聖書学の専門家に原稿を見てもらった。先ず，この場を借りて，お礼を述べなければならない。その中で，専門家の間では下記の諸版が常用されているとの指摘を受けた。

1）Quentin, H. et. al., *Biblia Sacra iuxta Latinam Vulgatam Versionem ad codicum fidem*（Typis Polyglottis Vaticanis），18 vol, Rome, 1926-1995.

2）Weber, R. and Gryson, R., *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem*, Stuttgart, 2007（1969）.

3）Wordsworth, J. and White, H. J., *Novum Testamentum Domini nostri Iesu Christi latine secundum editionem sancti Hieronymi*, 3 vol, Oxford, 1889-1954.

4）Sabatier, P., *Bibliorum sacrorum latinae versiones antiquae seu Vetus Italica*, Paris, 1743-1749 et 1751（Ex regia Reginaldi Florentain Rhemensis typographia）.

残念ながら，ここには筆者が本稿で底本に使った版は確かに含まれていない。それは信に値しないものを使用したことを意味するのだろうか。それを確かめるために，上記4）に当たってみた。その結果を，旧約聖書と新約聖書に分けて，以下に述べることにする。但し，聖者が実際に参照したであろう版は未特定であるうえ，無数の異本の存在を無視することもできないが，取り敢えずは，代表として挙げられている版を底本として使用することにする。

新約聖書の改訂作業は，よく「駆け足で行われた」と言われている。確かに，新約聖書の4福音書に限れば，同じ箇所ではほぼ百パーセントに近い確率（manducareが48箇所，非manducare が3箇所）で，manducareが使用されており，全く手が加えられていないとの印象を与える。しかし，実際はどうだったのか。古ラテン語版新約聖書の完成度が高かったため，解釈が混乱する一部の箇所を除いて，新たに手を加える必要はなかったのではなかろうか。従って，これは決して手抜き行為ではなく，そこでは既に準則の存在への確信が働いていたことになる。否，まだ迷っていたのかもしれないが。その証拠に，4福音書（7箇所の例外）などにおいては，manducareに完全に統一することはできなかった一方，古ラテン語版でmanducareが使用されていない箇所で手を加えてもいる。しかし，聖者はただ単にmanducareを追認したのでもなかった。古ラテン語版によって，準則観念の正しさを確信したに違いない。ここが重要な点である。これを無視してしまうと，古ラテン語版で既にmanducareが使用されていることから，聖者による同語の使用は独創性のない追認に過ぎなかったことになり，聖者の準則の真の意味がなくなってしまうのみならず，旧約聖書で動詞「食べる」がcomedereに統一されていることが謎のままに残されてしまう。

【旧約聖書】 ここでは，「食べる」を意味する3つの語が，下の表3が示す如く，何の規律もないか

の如く出てくる。これに対して，上掲表１との比較は現行ヴルガータ版聖書に手が加えられていることを明らかにしている。これに関わった人は匿名の複数の者たちであったのだろうか。しかし，３語の１語への統一は余りにも無謀すぎる。しかも，現行ヴルガータ版における統一語はedere, manducareや他の類似語ではなくて，古典期のローマの文人たちが愛用したcomedereであった。従って，それが出来るのは聖書に関する豊かな知識に加えて，明確な意図を持った者以外には考えられない。

表３：古ラテン語版旧約聖書で用いられている動詞「食べる」

書　　名	comedere	edere	manducare
Gn		5	6
Ex	5	4	4
Lv	3	5	1
Nb			1
Dt	2	1	5
Tb			7
Jdt			2
Jb	3	1	
Ps	1		8
Pr	2	1	(consumare : 1)
Qo	5		1
Sg	1		

旧約聖書や新約聖書とある以上，両者を一体のものとして考えるのが通常である。従って，この考えに立てば，ヘブライ語版における如く，両方において動詞「食べる」が同一語で表現されると考えるのが自然である。ギリシア・ローマの文芸は修辞学を屈指して事物を表現しようとする。一部の文化人にとってはこれ以上の魅力はなかったであろうが，その繊細な違いの理解は一般大衆には無用であった。一般大衆を対象とした聖書に，これと同じ方法を適用することはできない。聖書が求めるのは，彼らが理解できる簡潔な表現である。それがヘブライ語版聖書（「ヘブライ的真理」）にあることに聖者は気がついたに違いない。そこでは「食べる」を意味する言葉は１語に統一され，一般大衆が容易に理解できるものになっていた。

しかし，ラテン語版のみで確認される，旧約聖書ではcomedere，新約聖書ではmanducareが選ばれていること，また「食べる」の動詞を１語に統一することの必要性に関して，まだ如何なる答えもえられていない。

【新約聖書】 聖者は旧約聖書の時と同じ強い態度で，新約聖書に臨んだと考えるのが理にかなっている。しかし，事態はヘブライ語版旧約聖書とはまったく異なっていた。ここでは「食べる」を表す語

は３語ではなくて，同一語manducareの使用に特化していた。従って，誰もが新約聖書中のmanducareに関して，古ラテン語版の丸写しと思うに違いない。つまり，聖者はこの版に少しだけ手を加えたに過ぎないと。

実際もそうだったのであろうか。何故なら，これは当然予想されたことである。２世紀以降の古代ローマ世界において「食べる」を意味する日常語は正しくこのmanducareで，この語以外は聞こえてこなかったからである。ここから，フランス語のmanger，イタリア語のmangiare，ルーマニア語のmâncaが派生していることは既述のとおりである。しかし，古ラテン語版のヴルガータを読んでみると，上掲表３に新たに加えられたedere－これはmanducareとは異なって，サンスクリトに起源を持つ由緒正しい言葉である－の欄にある如く，教養人が書き言葉として常用していた語と出会うことが決して少なくない。ここに聖者の体臭や息遣いを感じることができる。今から聖者の改訂作業を追体験してみることにする。聖者の下半身がどっぷりと浸かっている古典期のローマ文学で使用されている，「食べる」を意味する語はcomedereやedereであって，庶民の日常語であった，後発のmanducareではなかった。知らず知らずのうちに，聖者の基層部分が現れてしまっているのかも知れない。

「マタイ」で動詞「食べる」が使用されている17箇所中の14箇所（ウルガータ版：10）でmanducareが使用され，それは現行ウルガータ版よりも３箇所多くなっている。例外として，15章32節で弟子たちに発した「群衆がかわいそうだ。もう３日も私と一緒にいるのに，食べ物がない」とのイエスの言葉では，１回限りではあるが，escareの語に出会う。13章４節「ある種は道端に落ち，鳥が来て食べてしまった」では，既述の如く，comedereが使用されている。この例外は26章21節「一同が食事をしているとき，イエスは言われた」で使用されているedereでも確認される。「マルコ」で動詞「食べる」が使用されている17箇所中の16箇所（ウルガータ版と同数）でmanducreが使用され，ただ一個所，つまり上述の「マタイ」13章４節の反復である４章４節では，例外的にcomedereが使用されている。

これに対して，「ルカ」で動詞「食べる」が使用されている18箇所中の12箇所でmanducareが使用されている。これは現行ウルガータ版と同数であるが，位置が異なっていて，４福音書の中で特に統一性を欠いている。12章22・29節，17章27・28節，22章30節では，edereが使用されている。８章５節では，既述の如く，comedereが使用されている。12章19節ではcomedereを含んだ箇所が省略されている。福音書の最後に置かれている「マタイ」では，ウルガータ版と同様，manducareへの統一が貫徹されている。

福音書以外に移ろう。「使徒言行録」（10, 41）に「イエスが死者の中から復活した後，ご一緒に食事をしたわたいたちに対してです」では，cummanducareが使用されている。これはギリシア語に特有の表現で，聖者はこのような複合語を避けることにしていたようである。「ヨハネの黙示録」（17,16）で

は「また，あなたが見た十本の角とあの獣は，この淫婦を憎み，身に着けた物をはぎ取って裸にし，その肉を食い，火で焼き尽くすであろう」との文章においてdevorareが使用されて，上掲の「マタイ」（13, 4；24, 38）の逆の現象が起きている。翻訳作業の進行を考えると，準則の徹底化と捉えることができるのではなかろうか。

以上，古ラテン語版旧約聖書における「食べる」を意味する３語の乱立，統一語の欠如は明白である。これに対して，同版新約聖書における「食べる」を意味するmanducareへの統一性は決して完全なものではなかった。また，そこには古典期ローマ文芸への愛着が認められることから，手が加えられていることは確かである。翻訳･改訂者は迷いを経ながら，４福音書の最後を飾る「ヨハネ」で準則の完成に至ったと推察される。

聖者の準則は１つ，または１つと１つではなくて，１対であることを軽視してはならない。聖者の凄さは互いに連携し合ったこの１対性を見出したことである。manducareに統一された新約聖書の版と同数の，comedereで統一された旧約聖書の版が伝存しているのであれば，聖者の準則は成立しなくなる。しかし，旧約聖書のこの種の版はまだ１編もその存在が確認されていない。また，聖ヒエロニュムスの翻訳・改訂版新約聖書は古ラテン語版のコピーに過ぎないとの主張に対しては，この前提から旧約聖書におけるcomedereの排他的使用が自動的に導きだされるのであれば，その方法を教示してもらいたい。それが出来ないのであれば，聖者の準則の正しさが否定されたことにはならない。旧約聖書におけるcomedere，新約聖書におけるmanducareの使用は連動しているのである。また，この準則なしに，旧約聖書におけるcomedereの使用はそれだけで新約聖書におけるmanducareの使用を予測することはできないし，その反対もまた同じである。

執筆後記

筆者は，あくまでも自称ですが，フランス中世史家と思っています。これまで聖書学，キリスト教学，宗教学などに関する研究は何もありません。今回の論文の発端をご説明しましょう。

筆者は中世フランスの庶民生活を垣間見るために，『セーヌ川を飲み干す―中世フランスの人名と心思―』の出版を長い間準備してきました。この本は，中世人の名前から彼らの心思を解明しようとする試みです。名前の１つに「人を喰う」があります。ラテン語で書くとmanducans hominemとなります。この名前を持つ人間は１人ではなく，中世ヨーロッパ全域でよく出会います。これに関しては，筆者は「中世フランスの食人種」という仏語論文を脱稿したばかりです。フランス人，イタリア人，ルーマニア人などが「食べる」の意味で常用している言葉は，このラテン語manducareから派生しています。このラテン語を辞書で引くと，２世紀の初出となっています。加えて，この新語は庶民の笑劇から生まれ

ていて，素性は良くありません。それ以前はedere（この語には使用頻度の高い同音異義語があったため，使用頻度は劣っていました）とその派生語comedereが使用されていて，これらはサンスクリト起源で非常に古く，由緒正しい言葉と言えるでしょう。人類最高の文芸作品が生まれた古代古典期の教養人が使用していたのが，この言葉です。この時期の文学を尊敬する者にとっても，「食べる」のラテン語はedereかcomedereで，彼らの頭にはmanducareはなかったようです。その後の知識人は文章を書く場合，日常会話でmanducareを使っていたとしても，書き言葉はedereかcomedereでした。そこで，聖書ではどうなっているのかを調べるために，一覧表を作成してみました。見事，起源の古いcomedereは旧約聖書，起源の新しいmanducareは新約聖書に偏在していることが判明しました。しかし，「聖書の言葉は神の言葉」に従えば，たとえ少数であっても，例外の存在は許されないため，例外の解明に努めました。他方，J.ミーニュ『教会教父著作集』（全124巻）で使用されている言葉のネット検索を行うと，4 世紀後半から 5 世紀初期の聖ヒエロニュムスの作品において，6 世紀のトゥール司教グレゴリウスや10世紀のクリュニー修道院長オドンなどと同様に，comedere への偏愛が確認されました。この聖者も，生涯古典期文芸の崇拝者であったことになります。こうして，通説に反して，古典期文芸は中世に入っても絶えることはなかってことになり，「ルネサンス」の居場所がなくなることになるでしょう。この後は，論文を読んで下さい。

従って，筆者が聖書に関する新しい研究動向に接したのは，結論の素描を含め，全体の 3 分の 2 以上を書き終えた時点ということになります。筆者の研究は聖書に関する専門的研究と部分的であったとしても全く重なってはいません。今回の論文は両者が偶然，ただ一点で交差した結果に過ぎません。筆者には続編を書く能力も気力も関心も全くありません。また，これに関する膨大な研究蓄積を知った今，これ以上書けば，専門家を冒瀆することになるでしょう。最後に言い添えますと，拙稿も含め－但し，着想は独自のものですが－，ここで取り上げられている論争も，コンピューターが今直ぐにでも解決してくれるでしょう。

さて，2 千年の時空を超えて小さな発見をした私の息子とは，これが最後です。興奮に始まり，落胆を経験し，最後に歓喜を分かち合ったこの 3 カ月は本当に貴重な体験でした。親ばかでしょうが，彼は如何なる困難にも耐える力を持っていると信じます。しかし，もしよろめいたり倒れそうになったりしたら，どうか救いの手を貸してやって下さい。